

 **JASM** The Japanese Association of
Social Welfare Management

日本社会福祉 マネジメント学会誌

Journal of Social Welfare
Management

2024 **Vol. 4**

Journal of Social Welfare Management vol.4

Challenges and Support
for Foreign Children with
Special Needs in
Nursery Schools

Etsuko Togo, Sachiyo Ishida,
Junko Nozawa

Research on the
effectiveness of
sustainable Oyaji-no-kai
as a childcare environment

Kenji Shimizu

Productivity gains from
new use of standing machines
A Case Study of Efforts at a
Nursing Home for the Elderly

Hiroyuki Morita, Tomoyuki Ohno

目 次

【原 著】	保育所における外国籍の特別ニーズ児への 対応の課題と工夫	4
	藤後 悦子 石田 祥代 野澤 純子	
	持続するおやじの会がもたらす 子育て環境としての効果に関する研究	18
	清水 憲志	
【事例報告】	スタンディングマシンの新しい使用法による生産性向上効果 A 介護老人福祉施設の取組事例から	32
	森田 裕之 大野 倫由	
	論文投稿について	41

CONTENTS

Original Articles	Challenges and Support for Foreign Children with Special Needs in Nursery Schools 4 Etsuko Togo, Sachiyo Ishida, Junko Nozawa
	Research on the effectiveness of sustainable Oyaji-no-kai as a childcare environment 18 Kenji Shimizu
Case Study	Productivity gains from new use of standing machines A Case Study of Efforts at a Nursing Home for the Elderly 32 Hiroyuki Morita, Tomoyuki Ohno

社会福祉の未来を拓く

社会福祉の未来を拓くとは、今日の課題に対処しつつ、明日への架け橋を築くことです。現代社会においては、高齢化と介護、貧困、子育て支援、虐待、孤立、障害者の社会参加など、多くの課題が私たちの社会に影響を与えています。これらの課題に対処し、持続可能な社会福祉を実現するためには、新たな視点とアプローチが求められています。

社会福祉領域は、人間関係や社会的な問題に深く関わるため、専門的な知識や技術が求められます。一方で、研究が現場の実践に伝わりにくいことがあり、実際のデータをもとに広く課題解決につながる研究を行うことが難しい場合があります。

しかしながら、社会福祉の研究は、私たちの社会の健全な発展には不可欠です。社会福祉の分野では、個人と集団の生活や幸福を向上させ

るための様々なアプローチや政策の構築が求められます。これには、人々の健康や安全、社会的なつながりの促進、経済的な安定の確保などが含まれます。また、社会福祉の研究は、人々の権利や尊厳の保護、社会的な包摂の促進など、社会の公正さと平等性を推進するためにも必要です。

私たちは、社会福祉の研究と実践が社会の持続的な発展に不可欠であることを認識し、その重要性をより広く理解し、支持することが重要です。今後も日本社会福祉マネジメント学会誌は、この使命を果たすためのプラットフォームとして、最新の研究成果や実践事例を発信し、社会福祉の未来を拓くための知識の共有を促進していきます。

金井 智恵子



【 原 著 】

保育所における外国籍の特別ニーズ児への 対応の課題と工夫

Challenges and Support for
Foreign Children with Special Needs in Nursery Schools

藤後 悦子
Etsuko Togo

東京未来大学
Tokyo Future University

石田 祥代
Sachiyo Ishida

千葉大学
Chiba University

野澤 純子
Junko Nozawa

國學院大學
Kokugakuin University

キーワード

外国にルーツを持つ子ども 特別ニーズ児 M-GTA
Children with foreign roots / Special needs children / M-GTA

要 旨

近年日本では、外国人の数が増加しており、これは保育現場における外国人幼児の増加を意味する。本研究では、保育現場における外国籍の特別ニーズ児への対応の課題と工夫について明らかにすることを目的とする。都市型分散地域に勤める首都圏と九州北部の保育所職員6名を対象にインタビュー調査を実施し、M-GTAにより分析した。その結果、118のエピソードが抽出され、大カテゴリー8つと32の小カテゴリーと53の概念が生成された。保育現場が直面する課題には、発達課題、情緒的問題、家庭の問題に対して複合的な支援が必要であった。子どもに対しては遊びを中心とした支援が有効であったが、保護者に対しては通訳や多言語資料、地域の専門機関との連携などが課題として挙げられた。

In recent years, the number of foreign nationals in Japan has been increasing, resulting in a corresponding increase in the number of foreign infants in childcare centers. The purpose of this study is to investigate the challenges that childcare centers encounter when dealing with special needs foreign infants. An interview survey was conducted with six employees from daycare centers located in urban dispersed areas in the Tokyo metropolitan area and northern

Kyushu. The collected data were analyzed using the M-GTA method. The analysis identified 118 episodes, which were further categorized into 8 major categories, 32 minor categories, and 53 concepts. The challenges faced by childcare centers encompassed the need for comprehensive support in addressing developmental, emotional, and family-related issues. Play-based support was found to be effective for children, while parents' needs included addressing interpretation, accessing multilingual resources, and fostering collaboration with local professional organizations.

1. 問題の所在

近年日本では、外国人との多文化共生社会の実現に向け力を入れている。1990年の出入国管理及び難民認定法の改正後も、2006年には「地域における多文化共生推進プラン」¹⁾を策定し、2020年には「地域における多文化共生推進プラン」改訂²⁾を行ってきた。日本で暮らす外国人の数は増加傾向を示しており、最新のデータによると、令和2年6月末には、約289万人となっている³⁾。

日本で暮らす外国人の増加は、同時に外国籍の子どもの増加も意味し、保育現場にも外国籍の子どもの入所が増えている。三菱UFJリサーチ&コンサルティングの報告⁴⁾によると、外国籍の子どもが在籍している保育所等の割合は全体の約6割となり、過半数を超えている。その中で、保育現場における外国籍の子どもの比率は、3%未満が約35%となっているが、10%以上も約24%となっていた。ルーツがあると思われる国籍は、中国(54.2%)が最も多く、続いて、フィリピン(25.6%)、ベトナム(19.4%)、韓国(15.3%)、ブラジル(13.3%)となっており、アジア圏を中心に多くの外国籍の子ども達が過ごしている。

外国人にとって言葉や文化が異なる日本で子育てを行うことは、多くの困難さがある。藤後・野澤・石田⁵⁾は、日本における外国人の子育てについて概観し、外国人の育児ストレスを

増幅させるような環境要因や親自身の要因、子どもの要因について検討した。例えば、環境要因としては、自然災害や新型コロナウイルス感染症などのパンデミックなど、親自身の要因としては、労働条件による貧困、親の病気や精神疾患、DV被害など、子ども要因としては子どもの障害などが挙げられた。

外国人の育児ストレスを軽減するためには、保育現場をはじめとする子育て支援施設の受け入れや対応が重要となる一方で、保育現場も多くの悩みを抱えていた。三菱UFJリサーチ&コンサルティング⁶⁾の「保育所等における外国籍等の子ども・保護者への対応に関する調査研究事業報告書」によると、入園申し込みまでの課題は、「入園に向けた手続き、準備について」や「保護者へ伝えることが難しい」、「入園にあたり文化的背景に対してどのような配慮が必要かわからない」などが挙がった。入園の際の課題については、「保育所等での過ごし方や支援内容、決まり、お願い等について保護者に理解してもらうことが難しい」「保育所等での生活を送るにあたり必要な情報を十分に理解していない」などが挙がった。そして、在園時の課題については、「言語的な障壁から保護者と十分なコミュニケーションが取れない」、「気になる行動が、言語的な障壁によるものか発達的な課題によるものかを判断することが難しい」などが示された。

発達的な課題とも関連するが、近年保育現場

では、特別な教育的ニーズにより特別なサポートを必要とする子どもの早期発見が重視されている。特別な教育的ニーズとは障害と重なる場合も多いが、特別な教育的手立てや学習における困難さに対するニーズを含んでいる⁷⁾。加えて、特別な教育的ニーズを構成する要素は文化的背景や子どもの発達・成長により変化するため⁸⁾、外国籍の子どもでかつ特別な教育的ニーズを抱える子ども（以下、外国籍の特別ニーズ児とする）は文化的背景と発達の遅れや学習上の課題といった複数の困難さを抱えている。また、外国籍の特別ニーズ児の場合、母親の言語やアクセスビリティへの問題がより困難を導くことも多い。このような中、本来であれば、手厚い支援が求められるが、外国籍の特別ニーズ児に関しては、早期発見や就学に向けた取り組み等、十分な支援があるとは言い難い。特に言語面での障壁があるために、「見守り」の期間が必要以上に長かったり、逆に現状よりも能力を低く見積もられて、特別支援学級や特別支援学校に措置される問題点も指摘されている⁹⁾。

そこで本研究では、保育現場における外国籍の特別ニーズ児への対応の課題と工夫点について明らかにし、それらを踏まえた上で今後求められる支援について検討する。なお、保育現場の選定にあたっては、地域性を重視した。外国人が住む場所は、ある特定の地域に集中して住んでいる集住地域、ある都市の中に分散して住んでいる都市型分散地域、少人数のみ住んでいる少数地域に分けられる。集住型の場合は、受け入れ側もノウハウの蓄積がなされているであろう。少数地域では、ノウハウの蓄積は少ないかもしれないが、そもそも外国籍の子どもが在籍する園の数が少なく、国籍も限られている。その点、都市型分散地域では、国籍の種別や在籍園も多く、かつ保育者不足の人的資源の手薄さからも課題が大きく、外国籍の特別ニーズ児への対応は難しいことが予想される。以上の理由から、本研究では都市部の分散地域の保育現

場に焦点を当てることとした。なお多面的に対応方法を検討するために、同一の保育所内で複数の職種の対象者にもインタビューを実施した。

2. 方法

調査期間：

2022年5月～8月

インタビュー協力者：

外国籍の特別ニーズ児は、障害のある子ども、愛着に課題を抱える子どもの区別が難しいため、両者を含め「特別ニーズ児」との判断を採用した。加えて、文部科学省の幼児教育の実践の質向上に関する検討会で報告¹⁰⁾の地域別在留外国人の分類を参考に、都市型分散地域の多数・多国籍が在園する保育所で、かつ外国籍の特別ニーズ児が在籍している（在籍していた）という条件で、地域に偏りがでないよう複数の地域にわたり対象園を選定した。以上のことを考慮し、本研究では都市型分散地域に勤める首都圏と九州北部と九州西部の保育所に勤務する4か所の保育所の職員6名（園長2名、主任2名、担任2名）を協力者とした（Table1）。性別は、女性3名、男性3名であった。年代は30代1名、40代3名、50代1名、70代1名であった。

Table1 対象者の概要

	性別	年齢	役割	園の規模	園の規模	地域(集住/散在)	備考(問題の内容、保護者の国籍や特徴)
A	女性	40代	担任	保育所A	大規模	都市型散在地域	【発達】モンゴル 母日本語弱、父日本語話せる
B	男性	40代	主任	保育所A	大規模	都市型分散地域	【発達】モンゴル、その他
C	男性	30代	主任	保育所B	大規模	都市型分散地域	【発達】今までかかわった数名の親を想定
D	男性	50代	園長	保育所C	大規模	都市型分散地域	【発達】アメリカ：アメリカ人基地に勤務
E	女性	70代	園長	保育所D	大規模	都市型分散地域	【愛着】ウクライナ、アメリカ
F	女性	40代	担任	保育所D	大規模	都市型分散地域	【愛着】ウクライナ、中国

インタビュー内容：

協力者1名に対して1回約30分～60分のインタビューを実施した。インタビュー内容は、はじめに「外国籍の特別ニーズ児の概要」（年齢、家族構成等）を確認して、次の質問を行った。

- 1) 外国籍で特別な配慮が必要な子どもの具体的な「気になる点」とはどのようなものですか？
- 2) 保育所での対応の難しさはどのようなものですか？
- 3) 現在対応で工夫されている点はどのようなものですか？
- 4) 今後外国籍で特別な配慮が必要なお子さんに対応するにあたり、どのような支援が必要だと思いますか？

倫理的配慮：

本研究は國學院大學の倫理審査を受けている。回答は無記名であること、自由意思であること、インタビューの内容が仕事の評価には影響しないこと、学術的な利用のみを行うことを記載し、署名による同意を得た。

データ収集と分析方法：

インタビュー内容は原則ICレコーダで音声録音した。録音が難しい場合は、筆記による記録とした(1件)。インタビュー内容は全て逐

語録としてテキストデータ化を行った。分析にはデータ・概念・カテゴリー間の関係を重視しながら理論を生成する木下¹¹⁾の修正型グラウンディド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いた。

分析方法は、下記の過程を得た。

- 1) 逐語化したローデータに対して、「分析焦点者」と「分析テーマ」を設定してデータを分析した。本研究では、「分析焦点者」を「外国籍の特別ニーズ児の受け入れ経験がある保育現場で働く職員」とし、「分析テーマ」を「保育現場における外国籍の特別ニーズ児への対応の課題と対応の工夫」と設定した。
- 2) 設定した分析対象者の発言の中の分析テーマに合致する発言内容を取り出した。発言内容について、抽象度を高めて表現したものを「概念」とした。ローデータの中の「保育現場における外国籍の特別ニーズ児への対応の課題と工夫点」の具体的なエピソードは118であった。これらの内容を一つずつ確認し、概念化して類似の概念をまとめていった。作業は、臨床心理学を専門とする大学教員1名と特別支援を専門とする大学教員1名で行い、全体のチェックを第三者の特別支援を専門とする大学教員で行った。
- 3) 作成された概念から共有するものを集めて「カテゴリー」とし、抽象度を高め分析

テーマを説明した。

- 4) 最後に得られた概念とカテゴリーから「保育現場における外国籍の特別ニーズ児への対応の課題と対応の工夫」の概念関係図を作成した。

3. 結果

得られたデータを木下¹¹⁾によるM-GTAの分析技法を参考に、本研究テーマである「保育現場における外国籍の特別ニーズ児への対応の課題と対応の工夫」に即し、対応の課題と工夫点を取り上げた。その結果、8の大カテゴリーと32の小カテゴリーと53の概念が生成された。Table2にカテゴリー・概念を提示する。以下に分析によって生成したカテゴリーについて、ストーリーライン形式で説明する。大カテゴリーを【 】, 小カテゴリーを『 】, 概念を「 】, エピソードを<>で示した。

【保育者が考える外国籍の特別ニーズ児の課題】

『子どもと他者との関係で気になる課題』として、保育者は、〈日本語が喋れるようになっていたけど、みんなで話そうとするときには、側転していなくなったりとか(略)〉と「行動面に気になることが多かった」と語った。また気になる行動としては、〈朝からずっとパンチ。通りがかりにもパンチ。怒るだけじゃなくて、何をしたらいいのかわからないというのも大きかったかもしれない〉と「言葉で表せない分、さらに攻撃性が高まる」様子が示された。〈A児(対象児)の感情が分かりづらく、感情がどんな感じなんだろう〉と「気持を理解することが難しい」と感じ、〈どことなくA児はA児と言う感じだった。(他の子ども達は)普段のパンチも見ていたし〉と「集団でなじめない」様子も気になっていた。

『保育活動の中での子どものつまずき』も気

になっており、〈いつもと違う、いつもの支度の流れを急に变えるのはとても苦手、急に变えるのはとても苦手だった〉などの「見通しのつきづらさ」を有しており、〈折り紙が好きだったから折るんだけど、ちょっとずれたら、むきーと言ってぐちゃぐちゃにする〉など、「保育活動の中でのこだわり」が強く、〈言葉の発達にも関わらず気になるところが残っていた〉と「発育・発達の遅れ」も気になっていた。

『外国を理由としたアセスメントの難しさ』として、〈外国人だから遅いのか、発達上の問題があるから遅いのかなどの見分けが難しい〉と「日本語習得に理由があるのか不確か」であり、〈食事面でうまくいかないときに、発達上の問題で食事を嫌がるのか、味覚障害などで、それとも文化的な背景の問題なのかがわからない〉と「文化の問題なのか発達の問題なのかの区別が難しい」とのコメントが示された。さらに親子関係で問題を抱えている場合もあり、〈発達面よりも心の方が気になった〉と配慮が必要な点として『親子間の愛着の問題』も挙げられた。

【保育者が考える外国籍の保護者の課題】

保護者との関係においても保育者は悩んでいた。保護者対応は、『外国人保護者の書き言葉の理解困難さ』があり、〈日本語のお手紙を渡していたら全然通じてなかった〉と「お便りや連絡帳などの書き言葉でのやりとりの難しさ」があった。『外国人保護者の日本語レベルの低さ』が背景となり「最適なコミュニケーションの方法を申告してもらう必要性」や「両親ともに日本語が出来ないときの対応の難しさ」や〈宗教上の要望があることもあり、どこまで対応してよいかかわからない〉など『食事に関する文化的理解の問題』も示された。

さらに〈この人の場合は、食事面で園に対して要求してくる〉など「家庭背景による偏食と園への食事に関する要求」が強かったり、〈お

父さんは、イスラム圏の人だから、豚肉とか食べさせたらダメだと」と、「夫婦間の考え方のズレ」があったり、〈父親の暴力で〇〇県から逃げてこられた〉と「夫婦間のトラブル」があったりして〈親自身が不安定なので、攻撃的

な言葉が多い〉側面が見られ、「母親の情緒的問題」を保育者は気にしていた。特に食事に関しては、宗教を背景にしたものなのか、家庭の問題なのか、発達の問題なのかの見極めが難しかった。

Table2 外国籍の特別ニーズ児とその家庭が抱える課題と保育所の支援内容

大カテゴリー	小カテゴリー	概念	定義
外国籍の特別ニーズ児の課題 (18)	子どもと他者との関係で気になる課題 (8)	行動面に気になることが多かった (2) 言葉で表せない分、さらに攻撃性が高まる (2) 気持ちを理解することが難しい (2) 集団でなじめない (2)	日本語習得以外の側面での多動的な側面 言葉で表現できない分、先に手が出てしまっている。 言葉が流暢でない分、気持ちを理解することが難しい。 集団には入れず仲間集団が形成されていない。
	保育活動中での子どものつまづき (3)	見通しのつきづらさ (1) 保育活動中でのこだわり (1) 発育・発達の遅れ (1)	保育活動中でのこだわりで気になる様子 言葉以外の全体的な発達の遅れ
	外国を理由としたアセスメントの難しさ (3)	日本語習得に理由があるのか不確か (2) 文化の問題か発達の問題かの区別が難しい (1)	行動の理由が日本語習得なのかどうか分からない。 発達の問題か文化の問題か、味覚障害の問題化わからない。
	親子間の愛着の問題 (4)	親子関係など愛着の問題が気になる (4)	DVなどによる親子関係の問題が気になる。
保護者が考える外国籍の課題 (22)	外国人保護者の書き言葉の理解困難さ (5)	お便りやお知らせなどの書き言葉の理解の難しさ (5)	会話は問題ないとしても読解力に課題がある。
	外国人保護者の日本語レベルの低さ (5)	最適なコミュニケーションの方法を申告してもらう必要性 (4) 両親ともに日本語出来ないときの対応の難しさ (1)	保護者の日本語レベルがわからないので、どのように対応すればよいか戸惑う。 両親ともに日本語ができないときの大変さ。
	食事に関する文化的理解の問題 (7)	宗教上の食事制限 (3) 家庭背景による偏食と園への食事に関する要求 (4)	宗教を背景とした食事の考え方の違いによる対応の検討 宗教以外の食に対する考え方の違い
	夫婦間の考え方のズレ (2)	夫婦関係に基づく食事制限への要求 (2)	夫婦の問題を背景とした食事に関する問題と園への過剰な要求に対する対応の難しさ。
	夫婦間のトラブル (2)	家庭の問題 (2)	夫婦間で抱えるDV問題
	母親の情緒的問題 (1)	母親の情緒が不安定 (1)	家族の問題を背景に親自身が不安定である。
保育者自身の抱える課題 (23)	保育者の英語力の問題 (3)	保育士が英語喋れない (3)	保育者で英語を喋れる人の人数に限りがあるので、対応が難しい。
	保護者とのコミュニケーションへの不安 (8)	どこまで伝わっているのか不明 (6) 電話はよりコミュニケーションが難しい (2)	伝えたことがどこまで相手に理解されているのかわかりづらい。 電話の場合、視覚的情報が少ないのでよりコミュニケーションが難しい。
	日本の子育て文化を伝える難しさ (2)	日本の子育て文化の理解の難しさ (2)	日本の子育て文化そのものの理解が不足しているので、コミュニケーションが難しい。
	発達の課題を伝える難しさ (3)	保護者へ伝える戸惑い (1) 保護者の関心の低さ (1) 父母間の問題意識の違い (1)	保護者にどの程度発達の課題について伝えてよいかわからない。 保護者の無関心さに対応に苦慮する。 夫婦間の認識の違いに対応の難しさを感じる。
	外国人保護者へ専門用語で説明する難しさ (7)	保護者に対して、専門用語を説明することが難しい (5) 専門用語での説明の必要性 (2)	病気のことや発達のことなど、専門用語に対する説明が難しい。 所見や書類などに専門用語が用いられているときに説明する難しさ。

制度や福祉サービスの課題 (2)	言語サービスの問題 (5)	保育園に来る前の事前の段階での 通訳サービスの不足 (1) 公的な資料がすべて日本語であることの難しさ (2) 専門用語の多言語による説明冊子の必要性 (2)	公的サービスが日本語でないため、 制度の説明が理解できていない。 公的な書類が全て日本語であることで、 保育現場も不都合を感じている。 専門用語に対して多言語の説明書が必要である。
	日本の子育て文化や発達に 精通した通訳者の不足 (3)	通訳の人が理解を深めてもらう (3)	言語的な通訳のみでなく、 文化的な背景を含めた通訳を期待する。
	専門機関との連携不足 (7)	専門機関とのつながりのなさ (5) 関係機関同士の誤解 (1) 卒業後のフォロー不足 (1)	専門機関と連携できていないことに課題を感じている。 連携不足による情報共有が出来ていない問題 卒園後の状況が分らない
	加配の仕組みの問題 (2)	気になる状況でも加配がつかない (2)	加配がつかないことで、保育がまわらない大変さ
	複合的な問題へのサービスの不足 (1)	外国人と家族問題という複合的な課題 (1)	外国人や気になる行動、DVという複合的な問題が絡んでいる。
	地域資源の不足 (3)	外国人子育て家庭としての居場所の必要性 (2) 検査検査を実施できる場所がすぐに見つからない (1)	同胞と分かり合えるなど、子育てのよりどころとなる 居場所の必要性。 検査場所の不足により検査ができない困り感。
	行政の関心の低さ (2)	行政の関心の低さ (2)	行政が関心を持ってくれないので、 その後の対応に繋がらず困っている。
受容的な雰囲気 の 組織づくり (8)	受容的な雰囲気 (6)	周りの子ども達からの受容 (4) 職員が親子を全面受容して関係性を築く (2)	周囲の子ども達から受容的に受け入れられる体験。 職員が関係性を作るために親子を全面受容していく。
	保護者の受容 (2)	保護者同士のサポート (1) 特技を生かせる場の提供 (1)	保護者同士で困っていることに対してフォローする。 文化的な特徴を踏まえた特技を生かす場を提供して、 皆に受け入れられる。
遊びを中心とした 支援 (11)	遊びを通した関係づくり (6)	遊びを通して仲間関係を築いていく (5) 好きな友達から遊びが膨らむ (1)	好きな遊びを通して、仲間関係を作っていく。 友達を起点として、好きな遊びが広がっていく。
	保育中の対応の工夫 (1)	保育中のわかりやすい対応 (1)	保育活動中もわかりやすい対応を心がける。
	遊びを通した自信の獲得 (2)	得意なことを見つけて、認められる (2)	得意な遊びで認められて自信をつけていく。
	保育環境による成長 (2)	保育園の環境により成長する (2)	保育園での生活を通して成長していった。
保護者との コミュニケーション の工夫 (6)	外国人保護者の日本語レベルの アセスメント (1)	外国人保護者の日本語レベルを確認する (1)	保護者の日本語レベルを把握して、その後の支援を考える。
	各家庭に応じた適切な伝え方 (5)	ボディランゲージでの対応 (2) 具体物、連絡帳、書面を活用してフォローする (3)	非言語的コミュニケーションを活用して気持ちを伝える。 視覚的な情報を活用して、わかりやすく伝える。
園内外の 支援につながる 組織作り (9)	組織内の情報共有 (1)	職員会議での共有 (1)	気になる子どもの様子を職員会議で情報共有する。
	関係機関との連携によるサポート (8)	関係機関のサポート (3) 就学に向けて情報共有と申し送り (5)	関係機関が生活についてサポートしてくれる。 就学に向けて、他機関と連携しながら支援を行う。

【保育者自身の抱える課題】

外国籍の特別ニーズ児の支援には、保護者への対応も避けて通れず、保育者は外国人保護者への支援に自身の課題を感じていた。最も保育者を悩ませていたのが『保育者の英語力の問題』である。英語への苦手感を持っている保育者は多く、〈保育士の方は英語も知らない人が多いので〉と「保育者が英語を喋れない」ことに直面していた。また一生懸命話そうとしてもどこまで伝わっているか不明であり、「電話は

よりコミュニケーションが難しい」と口元が見えない中で、『保護者とのコミュニケーションの不安』を抱えていた。

加えて、外国の子育てと日本の子育ては習慣が異なることが多く、『日本の子育て文化を伝える難しさ』と向き合うことになった。また語学力の壁や子育て文化の違いを感じながら、子どもの発達の偏りなどを伝えないとならないため『発達課題を伝える難しさ』を実感していた。〈日本語以外の言葉の理解の遅れのところ

は伝えていない」という「保護者へ伝える戸惑い」や「保護者に相談しても、あまり気にする様子はない」と「保護者の関心の低さ」も見られ、〈日本人のお母さんは気にしていても、アメリカ人のお父さんが全く気にしていない〉と「父母間の問題意識の違い」に難しさを感じていた。

発達課題を伝える際に専門用語が頻出するが、『外国人保護者へ専門用語で説明する難しさ』も加わって、保育者自身困難を抱えていた。〈病気とか障害とかの、専門用語になるとわかんなくなる〉と「保護者に対して、専門用語を説明することが難しい」ようで、〈教育相談などで日本語で所見を書いてもらっても、それをどうやって外国人の方に伝えるのか〉と困っており、「専門用語での説明の必要性」を感じていた。

【制度や福祉サービスの課題】

外国人家庭への支援を行うには制度や福祉サービスの利用は欠かせないが、現状では課題が多い。外国人家庭が保育所に入所する前の段階で、本来であれば公的な資料や説明など『言語サービス』が必要となるが実際は不足している。「保育所に来る前の事前の段階での通訳サービスの不足」や「公的な資料がすべて日本語であることの難しさ」があり、「専門用語の多言語による説明冊子の必要性」が求められた。外国人家庭は、外国人としての大変さに加え、家庭や子どもの課題など複合的な問題が生じてるケースがあるが、その際の「複合的な問題へのサービスの不足」が顕著であった。例えば、発達や情緒に課題がある子どもへの支援を行う際にも『加配の仕組みに問題』があり、保育現場のみの努力では限界がある。行政に働きかけてもいずれ帰国するからと『行政の関心の低さ』が報告された。通訳を依頼しても、『日本の子育て文化や発達に精通した通訳者の不足』があり、通訳者の専門性向上が喫緊の課題

であった。また支援の現状では、『専門機関との連携不足』もあり、保育現場以外で外国人親子を支える『地域資源の不足』も目立った。

【受容的な雰囲気づくり】

限られた資源の中、保育所は様々な努力を行っていた。まずは『受容的な雰囲気』を心がけており、〈生活習慣とかが違っていた時もあり、その時は全部受け入れていた気がする〉と「職員が親子を全面受容して関係性を築く」中で、「周りの子ども達からの受容」も行われるようになってきた。

さらに〈園児のお母さんがフォローしてくれてからよかったけど、あれがなければ伝わっていなかったかも〉と「保護者同士のサポート」の重要性を認識しており、『保護者の受容』を皆で行っていくために、〈夕涼み会の時には、チヂミとかを焼いてもらって、文化の違いなども、辛かったから、他のお母さんたちもやっぱり本場は違うよねとか言って、受け入れていた〉と保育所として外国籍の特別ニーズ児の保護者の「特技を生かせる場の提供」などの工夫を実施していた。

【遊びを中心とした支援】

外国籍の特別ニーズ児への対応は、『遊びを中心とした支援』に力を入れていた。〈大好きな遊びが見つかったからは、人間関係がよかった〉と「遊びを通して仲間関係を築いていく」中で「好きな友達から遊びが膨らむ」ことに保育者は手ごたえを感じていた。

遊びを通して子ども達は絆を深めており、保育者は「保育の中のわかりやすい対応」を心がけ『保育中の対応の工夫』を行っていた。外国籍の特別ニーズ児も遊びの中で得意なものを見つけて皆に認められることで、『遊びを通じた自信の獲得』が可能となり、〈祭りでは3人で積み木の園舎を作って、棟梁と呼ばれるようになり〉と、「得意なことを見つけて、認められ」

自信を獲得していったエピソードが報告された。読み書きや偏食の改善などに関しては、〈ひらがなを教えると、お母さんは分からないから、保育園でわりと自分で書けるようになっていた〉と「保育園の環境により成長する」ことを目の当たりにし、『保育現場による成長』を実感していた。

【保護者とのコミュニケーションの工夫】

よりよい支援を行うために『外国人保護者の日本語レベルのアセスメント』を行い、各家庭の言語レベルに応じた支援を試みていた。例えばボディランゲージを可能な限り使って伝えたり、具体物を見せたり、書面で渡したり、連絡帳にはルビを必ずうったりと、「各家庭に応じた適切な伝え方」を保育者個人が出来る限り行っていた。

【園内外の支援につながる組織作り】

丁寧に細やかな支援を行うために、〈職員会議で毎月話していた。職員も周知できていたので、〇〇君はということでもみんな理解できていた〉。職員会議を利用して「職員会議での共有」など『組織内の情報共有』を行っている。また、就学に向けての情報共有や申し送りを外部機関へ行ったり、「就学に向けて情報共有と申し送り」として〈仕事とか生活とかは、母子寮の人がサポートしてくれていた〉と『関係機関と協力したサポート』も行っていた。〈小学校の申し送りの時には、小学校の先生は保育園にきてくれて、9名2時間分伝えた〉と「就学に向けて情報共有と申し送り」もしっかりとなされた。

各カテゴリー間の関係

以上のようなストーリーラインをもとに、本研究の目的に沿って、保育現場の課題と対応の工夫について、カテゴリー間の関係を図式化したものがFigure 1である。

保育現場が抱える課題は、保育の課題と保育

を支える人材や制度の課題に分けられた。保育の課題は、保育者が考える外国籍の特別ニーズ児の課題と保育者が考える外国人保護者の課題があるが、保育現場はすでに多くの工夫をしながら対応していた。具体的には、まず初めに【受容的な雰囲気づくり】に努め、外国籍の特別ニーズ児の親子ともに保育園生活に対する心理的安全性や信頼感を高めてもらっていた。そして、日々の保育の中では、【遊びを中心とした支援】を行い、保護者との関係も【保育者とのコミュニケーションの工夫】を日々行っていた。保育や保護者との関係から得られた情報は、組織内で情報共有がなされ、状況に応じては他機関との連携も行いながら、【園内外の支援につながる組織作り】を意識しながらチームとして対応を行っていた。このような対応の工夫を行うことで、【保育者が考える外国籍の特別ニーズ児の課題】や【保育者が考える外国人保護者の課題】にも変化が生じていた。

保育の課題を工夫しながら乗り越える中で、保育者は自身の抱える課題と直面していた。保育者自身の英語力や日本の文化や習慣の伝え方、専門用語の説明の難しさを実感していた。特に外国籍の特別ニーズ児といっても英語圏を中心とした外国籍とは限らない。保育者個人の努力のみで、様々な言語に対応することはほぼ不可能である。ゆえに、制度や福祉サービスの課題の改善が急務であった。現状の保育現場のみでは限界も示され、保育や日本の子育ての風習に精通した通訳者やICTを使用した言語サービスなど制度的な支援も含めて検討が求められた。

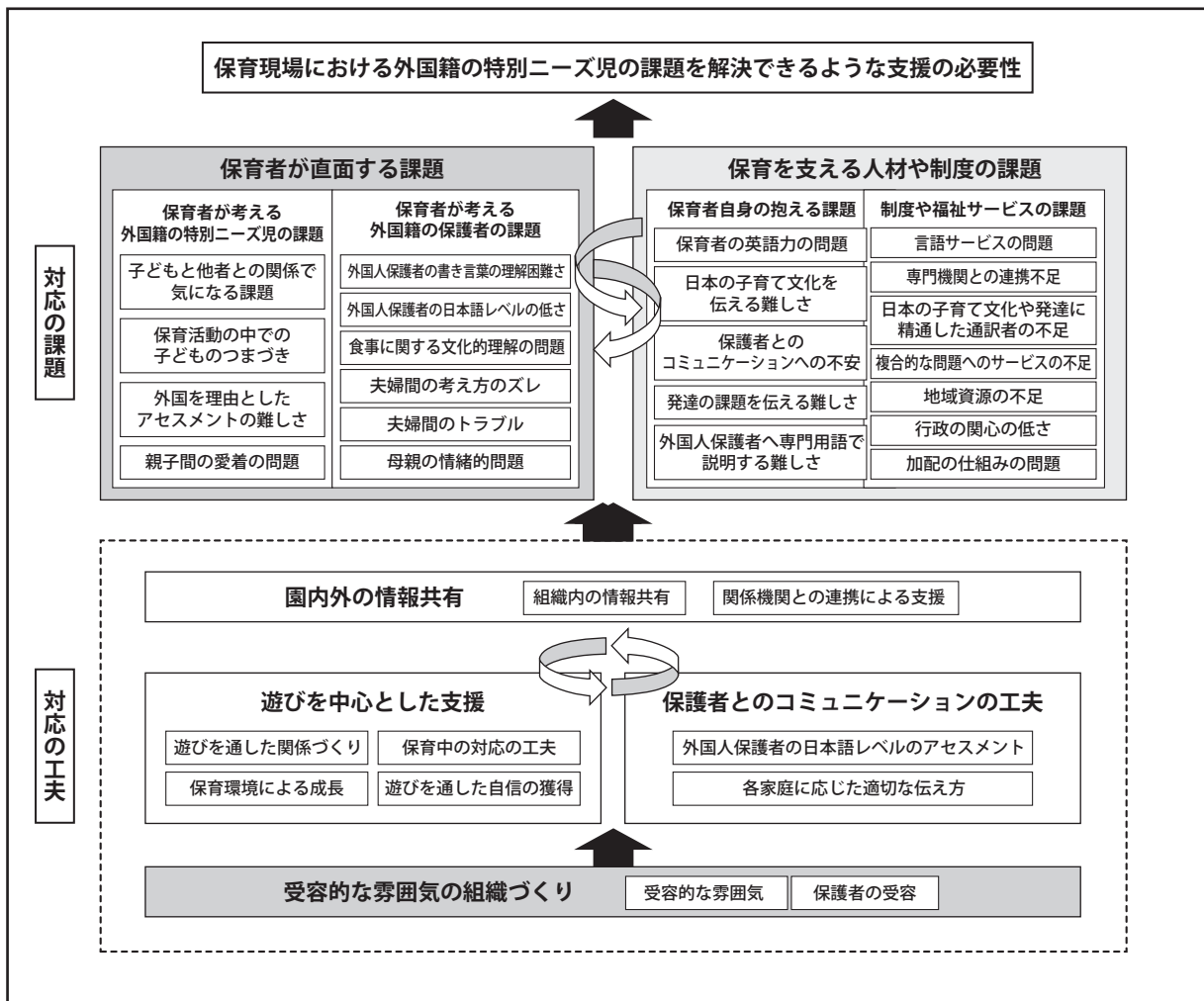


Figure1 各カテゴリーの関係図

4. 考察

本研究では、外国籍の特別ニーズ児への対応について明らかにした。保育者は、文化的な背景を考慮しながら、特別ニーズ児の特徴を把握するために行動面やこだわり、社会性、食事の面から総合的な情報を得よう工夫していた。外国籍の特別ニーズ児は、外国籍および特別ニーズ児という重複の困難さを抱え持つが、保育者は、子どもに対しては遊びを中心とした支援を行っており、その有効性に手ごたえを感じていた。一方、外国籍の保護者に対しては通訳や多言語資料、地域の専門機関との連携などが課題として挙げられた。

外国籍の特別ニーズ児に必要な配慮とは

外国籍の特別ニーズ児に対しては、発達面の配慮、言語理解の配慮、親子関係への配慮などが挙げられた。特に発達面と言語理解の配慮については、どちらが主問題かの把握が難しいと感じていた。一方で、食事面でも戸惑いが生じており、子どもの偏食が発達面の問題なのか、家庭での食の偏りの問題なのか、または宗教的な問題なのかという3つの側面での判断に難しさが示された。

宗教的な側面としては、イスラム教文化やベジタリアン文化などの配慮が必要であるが、例えば、離婚前の夫からの恐怖により必要以上に食事制限を行っている事例など複雑な問題も示

された。アセスメントの視点として、行動面や情緒面、知的側面などにのみ焦点を当ててではなく、「食事」を介して見えてくるものも多く、「食事」は、外国籍の特別ニーズ児を理解するための切り口になる可能性が示唆された。

外国籍の特別ニーズ児への遊びを中心とした支援

外国籍の特別ニーズ児への支援は、基本的には日本人の特別ニーズ児への支援と共通する点が多かった。配慮が必要な行動が、特性によるものか、言葉の障壁によるものか、家庭環境によるものかのアセスメントは重要であるが、対応方法は基本的には「遊び」と「生活」を通じたものとなり通常の保育支援と共通するアプローチであった。

すなわち、初めに外国籍の特別ニーズ児が安心する関係性を保育者と構築して、その関係性を基に、対象児の「好きな遊び」を見つけ、「遊び込む」経験を積み重ねる。子ども達は、その中で自己効力感を獲得し、遊びを通して対人関係を広げていくことが可能となっていた。また発達的な遅れが気になる部分に関しては、個別の声かけやかかわりを通して、個人の変化や発育・発達を促していた。

外国籍の特別ニーズ児の保護者対応の難しさ工夫

外国籍の特別ニーズ児への支援は、従来の保育での関わりの応用が可能であったが、一方で多くの保育者は保護者対応の課題に直面していた。

外国籍の特別ニーズ児に関する連携以前に、通常の保育での情報共有の難しさが示された。そもそも保護者の語学力や専門的知識の理解力がどの程度であるのか把握することが難しく、口頭でのコミュニケーションが可能であったとしても、お便りや連絡帳など書き言葉になると情報伝達が困難になり時間もかかっていた。加えて、日本の子育て文化や日本の社会的なシス

テムを理解してもらう必要があるが、その説明や対応については、語学面を含めて保育現場主体による支援の限界を感じていた。三菱UFJリサーチ&コンサルティング⁴⁾の調査でも保育現場から国や自治体に望む支援として、ICTを活用した言語的支援や資料翻訳、共通の支援窓口・支援人材確保可能な制度などが挙がっており、今回のインタビューからも同様の結果が示された。

本研究では、保護者自身へのインタビューを実施していないが、金田¹²⁾のコミュニティ通訳者を対象とした研究では、外国人の親自身からも保育園や小学校に関連する相談が挙がっており、就学は保育現場、親双方にとって重要な関心ごとであることが示された。特に発達障害など外国籍の特別ニーズ児の親は、入学前の情報の少なさや発達検査の低い数値（実際の能力よりも）、日本語で伝えられないもどかしさ、日本の学校システムへの不安など多くの葛藤を抱えている¹³⁾。

これらの課題を解決するために、保育現場はすでに様々な工夫を行っており、外国人保護者との関係性を作るため、相手の立場を理解した受容的な対応や相手の特技を生かした仲間づくりなどを実践していた。

外国籍の特別ニーズ児を支える保育現場が求める支援とは

本研究の結果より、保育現場で求められている支援としては、通訳等の言語サポートの支援と、各種書類や専門用語による説明の言語的な支援などが示された。これは、藤川・田邊¹³⁾や鈴木・森山・五味・持田¹⁴⁾の指摘とほぼ同じ内容であった。今回は「外国籍の特別ニーズ児」とより対象を絞ったため、藤川・田邊¹³⁾以上に、医学的・心理学的・栄養学的な専門用語への対応の必要性が強かった。この点については保育現場のみでは対応が難しく、喫緊の課題として行政主体の支援が求められる。

また就学支援について、アセスメントの課題や保護者対応の課題も示された。外国籍の特別ニーズ児への支援に関しては、豊田市子ども発達支援センター¹⁵⁾が指摘するように、「特別な支援が必要かどうかの基準の確立」が重要である。発達の遅れを「外国人」というフィルターゆえに見過ごされる場合もある一方で、金⁹⁾が指摘しているように、日本語がうまく話せないことで発達障害と見立てられてしまうこともある。子どもの状態を判断する基準が急務である。

さらに、保育現場以外の生活支援も必要であり、他機関や外国人の子育てグループの紹介なども求められていた。特に外国人家庭の中には、夫が日本人で、妻がアジア圏の場合、妻の経済的地位の低さを利用してDVが発生している事例が示された。寺田¹⁶⁾が指摘するように、DVを子どもが目撃することによる心理的虐待への支援は、地域ネットワークを駆使した支援が不可欠である。

本研究の成果と限界

本研究は、外国籍の特別ニーズ児に対する対応について検討した。本研究の成果としては、近年増加傾向にある外国籍の特別ニーズ児に対する保育現場での支援の現状と課題、そして求められる支援内容が明らかになったことであろう。本研究対象は外国人人口が多い集住地域でなく、都市型分散地域であったものの、子どもたちの特性を加味しながらの園づくりや、組織づくりが行われている様子が伺えた。保育者は、外国籍の子どもたちを通常の保育の中で、日本の子どもたちと同じように対応しながらも、発達への課題、親子関係など愛着への課題を見極めようと努力を行っていた。また支援の工夫としても遊びを中心とした支援や保護者との信頼関係の形成、ICT機器などを使用した言語の壁をなくすような工夫なども実施しており、保育現場での子育て支援の効果が見いだされていた。一方で、保育者が抱える不安や課

題、そして保育現場が持つ支援資源の限界が明確になったことは、今後の保育現場への支援内容の検討への一助となるであろう。

本研究の課題としては、次の2点が挙げられる。まず1点目は、調査規模の限界である。今回選定した保育現場は、都市型分散地域（多数・多国籍型）に絞った調査であった。集住地域や少数地域の場合、子育ての様相が異なることが示されている^{17) 18)}。地域によっては、すでに同じ国の仲間による子育てコミュニティなどが出来て情報共有の度合いが異なるかもしれない。今後は地域間の比較や国籍の比較などを行うことで、より丁寧な支援の在り方が見いだせるであろう。

次に2点目としては、外国籍の特別ニーズ児の「アセスメント」の問題である。保育現場内であれば、個に応じた支援とういことで、各子どもの課題に沿った対応が可能であるが、就学への引継ぎや就学席の選定には正確なアセスメントが必要となる。外国籍の特別ニーズ児に特化したアセスメントツールの開発が望まれる。

文献

- 1) 総務省自治行政局(2006)「地域における多文化共生推進プラン」
https://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b6.pdf
(アクセス2023年12月12日)
- 2) 総務省自治行政局(2020)「地域における多文化共生推進プラン」改訂のポイント
https://www.soumu.go.jp/main_content/000718716.pdf
(アクセス2023年12月12日)
- 3) 出入国在留管理庁(2021)「国籍・地域別在留外国人数の推移」
<https://www.moj.go.jp/isa/content/001356650.pdf>
(アクセス2023年12月12日)
- 4) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング(2021)「令和2年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業 外国籍等の子どもへの保育に関する調査研究」
https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2021/04/koukai_210426_16.pdf
(アクセス2023年5月15日)
- 5) 藤後悦子, 野澤純子, 石田祥代(2023)「乳幼児および学童期を育てる外国人家庭の子育ての課題と必要な支

- 援について」『東京未来大学研究紀要』17, pp.199-208
- 6) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング(2020)「保育所等における外国籍等の子ども・保護者への対応に関する調査研究事業報告書」
https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2020/04/ko ukai_200427_1_1.pdf(アクセス2023年12月12日)
 - 7) 高橋智(2004)「特別ニーズ教育」という問いー通常の教育と障害児教育における「対話と協働」の可能性」『教育学研究』71(1), pp.95-103
 - 8) 石田祥代, 是永かな子, 眞城知己(2021)「インクルーシブな学校をつくる」『ミネルヴァ書房』pp.41-43
 - 9) 金春喜(2020)「『発達障害』とされる外国人の子どもたち」明石書店.
 - 10) 岡上直子(2019)「外国人幼児の受入れにおける現状と課題について 文部科学省幼児教育の実践の質向上に関する検討会(第7回)配布資料 2」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/140/shiryo/1422191.htm(情報取得2023/5/15)
 - 11) 木下康仁(2007)「ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法ー修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべてー」弘文堂.
 - 12) 金田拓(2018)「外国人住民の子育て支援通訳における相談頻度調査」『帝京科学大学教職センター研究紀要』3(2), pp.1-12
 - 13) 藤川純子, 田邊正明(2021)「発達障害児を育てる外国人保護者に対する支援の研究(1)ー南米出身保護者へのインタビューからの考察ー」『三重大学教育学部研究紀要』72, pp.489-504
 - 14) 鈴木良美, 森山ますみ, 五味麻美, 持田恵理(2018)「発達障害を有する外国人小児への保健師による早期発見・支援とその困難」『日本公衆衛生看護学会誌』7(2), pp.72-79
 - 15) 豊田市こども発達センター社会福祉法人豊田市福祉事業団(2008)「豊田市における外国人障がい児の現状と課題に関する調査報告書」
<https://www.fukushijigyodan.toyota.aichi.jp/web/wp-content/uploads/2021/03/gaikokujin.pdf>(情報取得/2023/5/15)
 - 16) 寺田貴美代(2020)「外国人DV被害者とその子どもたちに対する包括的支援体制の構築」『新潟医療福祉学会誌』20(1), pp.104-104
 - 17) 伊藤佳穂(2021)「共生社会への取り組みに関する研究ー埼玉県川口市芝園団地での実地調査からー」『東京女子大学言語文化研究』29, pp.1-39
 - 18) 田中宝紀(2016)「外国人散在地域に暮らす子どもの孤独一言語難民状態, 解決への糸口とは?」
<https://news.yahoo.co.jp/byline/tanakaiki/20160528-00058178>(アクセス2023年12月12日)

付記

本論文は, その一部を日本保育学会第76回大会にて発表している.

本研究は, JSPS科研費21K02716の助成を受けた.

【 原 著 】

持続するおやじの会がもたらす 子育て環境としての効果に関する研究

Research on the effectiveness of sustainable
Oyaji-no-kai as a childcare environment

清水 憲志

Kenji Shimizu

中国短期大学

Chugoku Junior College

キーワード

おやじの会 子育て環境 家族 持続可能 地域コミュニティ
Oyaji no kai / childcare environment / family / sustainable / Local Community

要 旨

本研究ではおやじの会に概ね10年以上関わっている人を対象に調査を行った。おやじの会に関わるに至った動機や10年以上参加している理由に着目することで、子ども達や地域の“子育て環境”として、父親達がおやじの会に関わった理由や、10年以上参加している理由等活動を行う中での意識の変容を明らかにした。そうすることで、子育て環境としてのおやじの会の可能性を言及した。

TEMを用いた分析をした結果、5つの時期区分に分けられた。第一期【父親の仲間渴望期】、第二期【おやじ仲間模索期】、第三期【おやじの背中魅せ期】、第四期【家族交流期】、第五期【おやじの地域溶け込み期】である。

結果、身近な地域を拠点としていることで、自分の“居場所”ができる。そこに“仲間”と“役割”があることで、父親を含め、おやじの会に関わる人々は、何年にも渡って関わり続けていた。さらに、父親である自分だけではなく“家族”で関われる場所だからこそ継続していた。おやじの会が紡いだ、仲間との関係性は、年数と共に関係性はより味わい深いものに醸成され、その関係性に子育て環境としてのおやじの会の意義があると考えられる。

In this study, we surveyed fathers who have engaged in a fathers' association (Oyaji-no-kai) for more than ten years. Our survey results revealed that respondents joined the association and continued to participate in it for over a decade to stay involved with their children and local communities as a "childcare environment." It also clarified their goals and changes in involvement awareness over time. The results of this study enabled us to explore the further potential of Oyaji-no-kai in childcare environments.

The results of the TEM analysis identified five stages of engagement: craving companionship, searching for companions, leading by example, family interaction, and blending with the local community.

The study results indicated that being involved in the local community helped fathers foster a sense of belonging. Having companions and assigned roles motivated fathers and individuals involved in Oyaji-no-kai to continue their involvement. Furthermore, fathers were enabled to continue attendance effortlessly with the association's support of them and their families. The friendships that fathers mutually established through Oyaji-no-kai deepened with time, and the results suggest that these relationships are the primary motivation for Oyaji-no-kai in childcare environments.

問題と目的

(1) はじめに

昨今、少子化や家、保育現場での虐待等様々な子どもに関わる問題があり、子育て環境の整備が求められる。2023年より、こども家庭庁が設置、こども基本法が施行され、第3条の6⁽¹⁾に「家庭や子育てに夢を持ち、子育てに伴う喜びを実感できる社会環境を整備すること」という理念が示されている。下線部に付則したように子どもが子どもとして尊重され、最善の利益を確保し、その父母の養育に対して十分な支援を行い、家庭や子育てに夢を持ち、子育てに伴う喜びを実感できる社会環境を整備する必要がある。そのためには、「持続可能」な形で子育て支援が行われ、今の親世代も子育てを楽しみ、育てられた子どもも自分達は尊重されていると感じながら未来に期待が持てるような、育て・育てられるということが循環する必要がある。また、山縣(2002)⁽²⁾が述べるように親子関係の中で親自身も育つことがある。そのためにはまず、子ども時代に未来を期待できる環境で育

てられ、大人への“憧れ”を持ち、自分も子育てをしたいと感じる必要性がある。また、子育ての在り方の世代間伝達として、井原(2015)⁽³⁾が「親が自分自身の親からの育児体験に強く影響されて自分の育児を行う」と示すように、本来子どもの育て方は自分が育てられた在り方に影響される。そのために多様な子育ての在り方を子ども時代に自分の肌で感じることで、多様な子育ての在り方を知ることができる。

おやじの会という父親主体の会がある。薄葉(2006)⁽⁴⁾は、「子育て、子供との触れあい、教育、健全育成、地域貢献、自主学习、そして男どうしのお付き合い等を目的として、男性のみが集まって活動する、学区もしくは地域単位の集団」と定義し、拠点を学区若しくは地域に置き、「男性のみ」が集まる会であった。学校に属する保護者の団体としてPTAがあるが、PTAと同じ“任意”団体ではあるものの、PTAからは独立した組織である。1983年に神奈川県川崎市で「いたか」という名称で結成されたのが最初のおやじの会と言われている。由来は子どもの発した「おっ、おやじ、いたか」という言

業であり、当時の父親が子育てに関わっていない状況を反映していた。そして、全国おやじサミットが2002年に香川で開催されてから毎年全国各地で行われ、「おやじ」達の交流が行われている。

おやじの会に関する先行研究として、上田(2007)⁽⁵⁾は、学校に協力するなかで、学校の教師との信頼関係が作られる事を示唆している。また、平田(2005)⁽⁶⁾や京須(2006)⁽⁷⁾の研究において、おやじの会が父親同士の関係を作り、その結果、父親達の子育て不安を解消し、父親自身が子育てへ主体的に関ろうとする意欲を高めていくことが示唆されている。

全国サミットの開催から20年が経過し、継続参加している会員も見られる。先行研究にもあるように拠点は基本的に「学区」若しくは「地域」である。今までの先行研究では、それらの拠点到に注目しているが、長年に渡っておやじの会が継続している理由や子どもが学区を離れても関わり続けていることについて、調査したものは無い。

そこで、本研究ではおやじの会に概ね10年以上関わっている人を対象に調査を行う。おやじの会に関わった理由や、10年以上参加している理由等活動を行う中での意識の変容に着目する。

(2) TEMについて

本稿では、時間軸を捉えながら「個人の経路の深みを探る」ことができる質的研究の一つとして、複線経路等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach: TEA)⁽⁸⁾を用いる。TEAについて安田(2015)⁽⁹⁾は、「複線経路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Modeling: TEM)」、「歴史的構造化ご招待(Historically Structured Inviting: HSI)」、「発生の三層モデル(Three Layers of Genesis: TLMG)」を統合・統括する考え方であると述べている。TEMの特徴は、単なる技法のマニュアルではなく、具体的なライフを丁寧に考えることを本質的に含

んでいる方法論である。TEM⁽¹⁰⁾におけるプロセスは、「時間が接続する中での対象や現象の変容」というように時間がキーワードとなっている。研究者が自身の関心に基づき、等至点(Equifinality Point: EFP)を設定し、出来事を語ってくれる人を「ご招待」し、個人の行為や価値観の変容を記述していくのである。安田(2012)⁽¹¹⁾は、 9 ± 2 を対象にすると、「経路の類型化」が見えてくると示唆し、その類型化こそが、社会・文化の様相を表す共通性を示すとしている。サトウ(2012)⁽¹²⁾は、TEMの概念ツールを、経路が発生・分岐するポイントである分岐点(Bifurcation Point: BFP)、EFPに至るまでの必須のこととして経験される出来事である必須通過点(Obligatory Passage Point: OPP)、EFPへの歩みを後押しする力である社会的助成(Social Guidance: SG)、EFPに向かうのを阻害する力である社会的方向づけ(Social Direction: SD)があり、時間軸に沿って図式化したものがTEM図である。なお、荒川(2012)⁽¹³⁾は、TEMを含む多くの質的研究は「一般化」を目指すものではないとしている。類型化は、類似した点を集約し、共通点を見出すものである。別の対象者に調査を行った場合は、別の結果や同様の結果が見られる可能性もあることを示唆した上で、そこで語られたことは、「事実」であり、そこから離れずモデルが作られているなら、1つの理解の仕方として乱暴な事ではないと再現性について述べている。

(3) 目的

本研究では、おやじの会に10年以上関わっている人を対象とし、TEMを採用した。おやじの会の人々の参加した理由、継続している理由等意識の変容を時系列に基づいて分析し、「外的環境との相互作用」や「他者(人・モノ)」との関係を「時間」の中で意味づけて、意識のどのような変容が見られたのかを明らかにする。そうすることでおやじの会が持っている意味と、父

親達の意識として、どのような目的を持って関わり、継続し、活動を続ける中でどのような変化が生まれ、長年に渡って活動し、“子育て環境”の一端を担うようになってきているのかを言及する。

方法

(1) 調査対象者

「全国おやじサミット」の関係者及び筆者が10年ほど前から関わりのあるおやじの会関係者等を通じて、インタビュー及び事例収集の協力を依頼し、ZOOM及び対面で父親9名にインタビューを行った。調査時期は2022年5月～11月に実施した。それぞれの時間は、概ね45分程度である。主な内容としては、「おやじの会に参加するきっかけや理由」、「活動を促した理由や阻害した理由」等について尋ねた。

活動場所はそれぞれ北海道、埼玉、東京、兵庫、香川、愛媛、熊本であり、結成及び参加した当初は学区に拠点をおいて活動していた。その後、地域に移行した者、地域と学区それぞれ

に属している者がいる。現在は下記の表1の通りである。なお、活動歴は通算年数である。また、会長の経験者が4名、会員が5名である。それぞれ行事担当の経験はあった。

(2) インタビュー

インタビューに先立ち、メール等を用いて趣旨説明を行い、賛同いただいた方に、調査を行った。おやじの会に参加した経緯や目的等や継続して参加し続ける理由を明確にするため半構造化インタビューを行った。過去(おやじの会に入る経緯や活動を行う中での関係性等)から現在(現在の状況)までを整理しながら尋ねることで、自覚していなかったこと等が言語化された。

(3) 分析方法

TEMに沿って、父親の変容を時系列で分析しながら、本研究が着目しているおやじの会に関わる父親の経験の過程を分析する。なお、用語の説明と本研究における用語の位置づけについては、表2に示す。

表1 調査対象者の概要

父親	年齢	活動歴	最初の加入状況	現在の加入状況	会の役割
A	50代	15年	幼稚園 (後の幼小中三校園に所属)	地域の会に所属	会長
B	50代	10年	幼稚園 (後の幼小中三校園に所属)	不参加	会員
C	60代	22年	小学校	地域の会及び小学校の会に所属	会長
D	60代	19年	小学校	地域の会に所属	会長
E	50代	21年	小学校	地域の会及び小学校の会に所属	会長
F	50代	15年	小学校	地域の会及び小学校の会に所属	会員
G	50代	18年	小学校	地域の会及び小学校の会に所属	会員
H	50代	14年	幼稚園	地域の会及び小学校の会に所属	会員
I	50代	10年	小学校	小学校の会に所属	会員

※2022年に行ったインタビュー時の状況

表2 TEMの用語並びに本研究における意味

用語	説明	データとの対応
等至点：EFP (Equifinality Point)	研究者が設定する分析範囲の 行為プロセスの終点	分析対象部分の結部で おやじの会についての到達点
分岐点：BFP (Bifurcation Point)	ある経験において転機となる状態や、 実現可能な複数の経路が 用意される状態の結節点	父親達に分岐となる点
必須通過点：OPP (Obligatory Passage Point)	等至点へのプロセス中で ほとんどの場合を経るであろう通過点	父親がおやじの会に 関わるにあたってほぼ必ず通る点
社会的助成：SG (Social Guidance)	その人にとって、等至点へ向かう 行為選択を後押しする力として働く 環境要因	おやじの会について 後押しする事象
社会的方向づけ：SD (Social Direction)	その人にとって、等至点から遠ざかる 行為選択を後押しする力として働く 環境要因	おやじの会から遠ざける事象

(4) 分析手続き

データ分析は下記の手順に沿って行った。

- ①インタビューで得られた語りをそれぞれ意味のあるまとまり(1文)ごとに切片化した後、ラベル化し、それを分析単位とした。インタビュー内容は表3に示す。
- ②それぞれの語りから、必須通過点、分岐点を設定した。研究協力者が活動を行う上で影響を及ぼした様々な要因を、SGとSDとして協力者の言葉を用いて設定した。
- ③それぞれのTEM図を作成した後に、「おやじの会のライフストーリー」となるように個々

のTEM図を統合して、一つにまとめた。

- ④TLMGについては、サトウ(2022)⁽¹⁴⁾、安田(2015)⁽¹⁵⁾を参考に、TEM図で設定された分岐点を基に、第一層の「行動レベル」(アクティビティの発生)、第二層の「意識レベル」(サインの発生)、第三層の「信念・価値観レベル」(ビリーフの発生)という3層によって理解する理論である。TEMによる分析はおやじの会の時間の流れの経験を通して、おやじの会の魅力を表出し、現在まで続く価値観を可視化するのに適していると考え、採用した。

表3 インタビュー質問内容

◎ おやじの会に入った・作った理由は？	◎ 仕事に何かしらの影響はありましたか？
◎ おやじの会に参加して子どもとの関りで変化はあるか？	◎ おやじの会に移行・新設するのか？
◎ おやじの会に参加して妻との関りで変化はあるか？	◎ 引退は考えているか？
◎ 活動を促した理由や阻害した理由は？	◎ おやじの会として今後の展望は？
◎ 他の会との連携が具体的によかったこと？	

(5) 倫理的配慮

調査に先立ち、所属研究機関の倫理審査を受け承諾された(受付番号3-6)。また、研究協力者に依頼する際、研究の目的、方法、時程等を説明し、途中辞退できることも伝えた。Zoomでインタビューを行ったため、口頭での承諾を得た後に録音を始めた。また、調査対象者名は全てアルファベット表記として、個人が特定されることの無いように配慮した。

結果

TEMを用いた分析により、会員であるBのおやじの会に関わる経験が図1、Bを含めた調査協力者の経験を統合したのが図2である。(以下TEM図と表記)なお、本文中の【 】はTEM図における時期区分名を〔 〕は父親のラベルと、可能性としてありうる行為のラベルを『 』はインタビューデータを意味する。父親達の行動の中で、行動、活動の展開が変化したと考えられる点を境に、おやじの会における父親達の経験を第一期【父親の仲間渴望期】、第二期【おやじ仲間模索期】、第三期【おやじの背中魅せ期】、第四期【家族交流期】、第五期【おやじの地域溶け込み期】という5つの時期区分に分けた。以下TEM図と対応させて、本事例における父親達の概説をする。

第一期【父親の仲間渴望期】

まず、[子どもが入学(入園)する]が第一歩である。そこで、子どもの参観日等の行事に参加した際に当時はまだまだ、父親が参加しているケースが少なかった。そんなこともあり、父親が参加すると目立ってしまい、『だからあんた出ん時というパターンがすごく多いねん。それでこういう会を作ってくれたら私らも行きやすい。』のように、今後のことを踏まえて足踏みするケースがあった。そして、『任意ですと集まらない可能性があるやん。さっきも言っ

たけどゼロかもしれへん。だから保護者、幼稚園の保護者全員に強制的におやじの会に入れたらどうでしょうかという意見もあった。僕はそれは嫌やと言った。やっぱりやるには有志。やる気がある人でないと続かん。』とあり、PTAのように原則全員が参加するのではなく、“同じ価値観”を持った[父親の仲間(友達)が欲しいと思う]とあるように仲間と活動することの意義を感じている。ただ、行事に参加する中で男性の数が少なく、行きにくさを感じているだけではなく、子どもや家族、拠点となる学校のために同じ父親としての仲間を求めていることが分かる。その根底には、『子どもみたいと思う。自分達の』や『幅広くいろんなお父さんたちの持つ趣味であったり、子どもたちと交えてそういう(門松作りや釣り)楽しいこと。』というような、“子どもの様子を自らの眼で見たい”や“子どもと楽しいこととして関わりたい”という思いがある。

そして、その時のおやじの会の有無により次の行動は変化する。有る場合は、参加すればよいが無い場合は、おやじの会に関わったことがある人や知っている人の存在が大きい。作った人はみんな、他者から聞いたか、他学区で活動するおやじの会の存在を知った上で作っている。ただ、行事に父親が多くいる状況ではなく、同じ価値観を持った“仲間”を求めている様子が伝わってくる。また、仲間ができる事で、自分が苦手なことも得意な仲間にきっかけをもらい、子どもと共に楽しもうとしている。

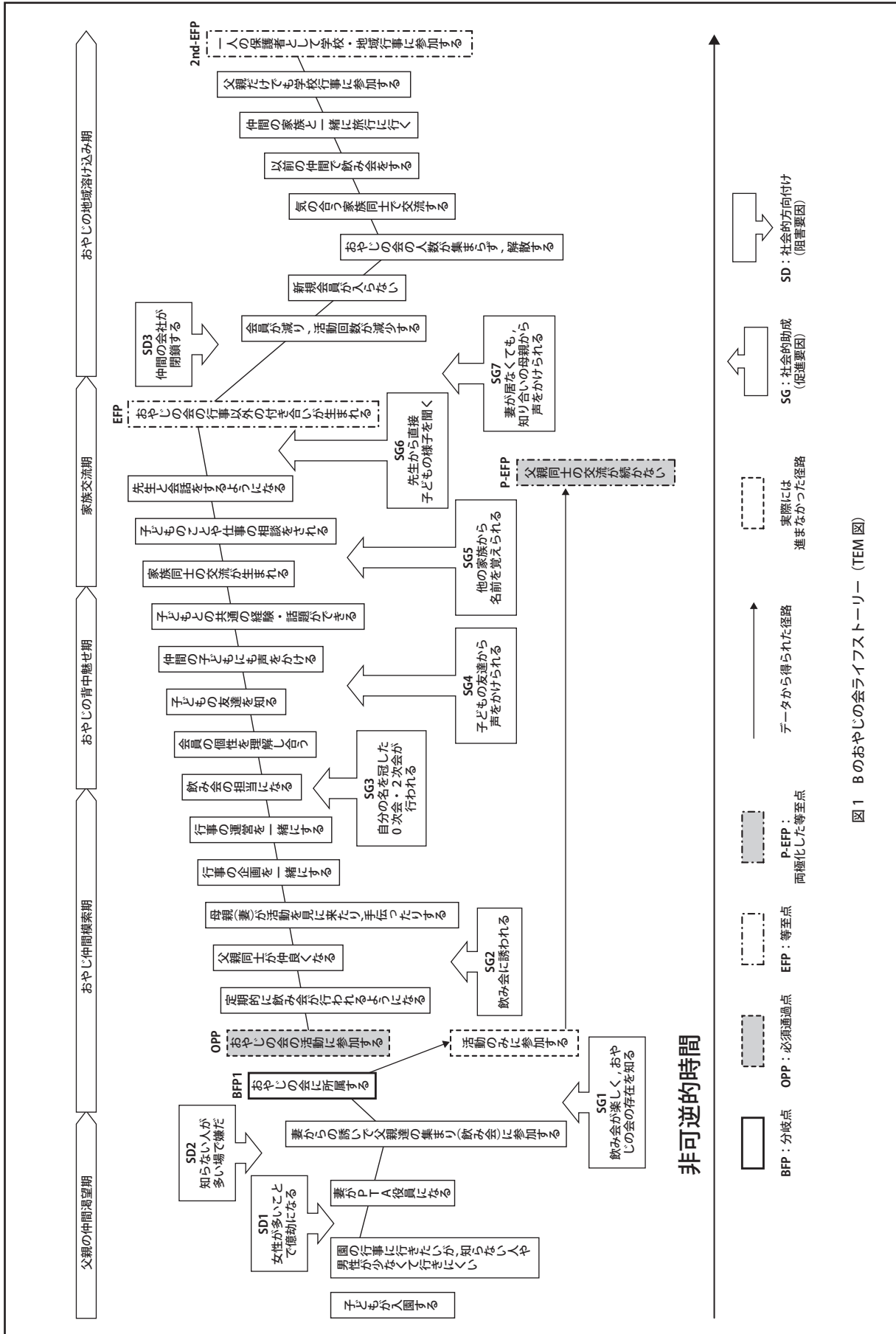


図1 Bのおやじの会ライフストリーター (TEM図)

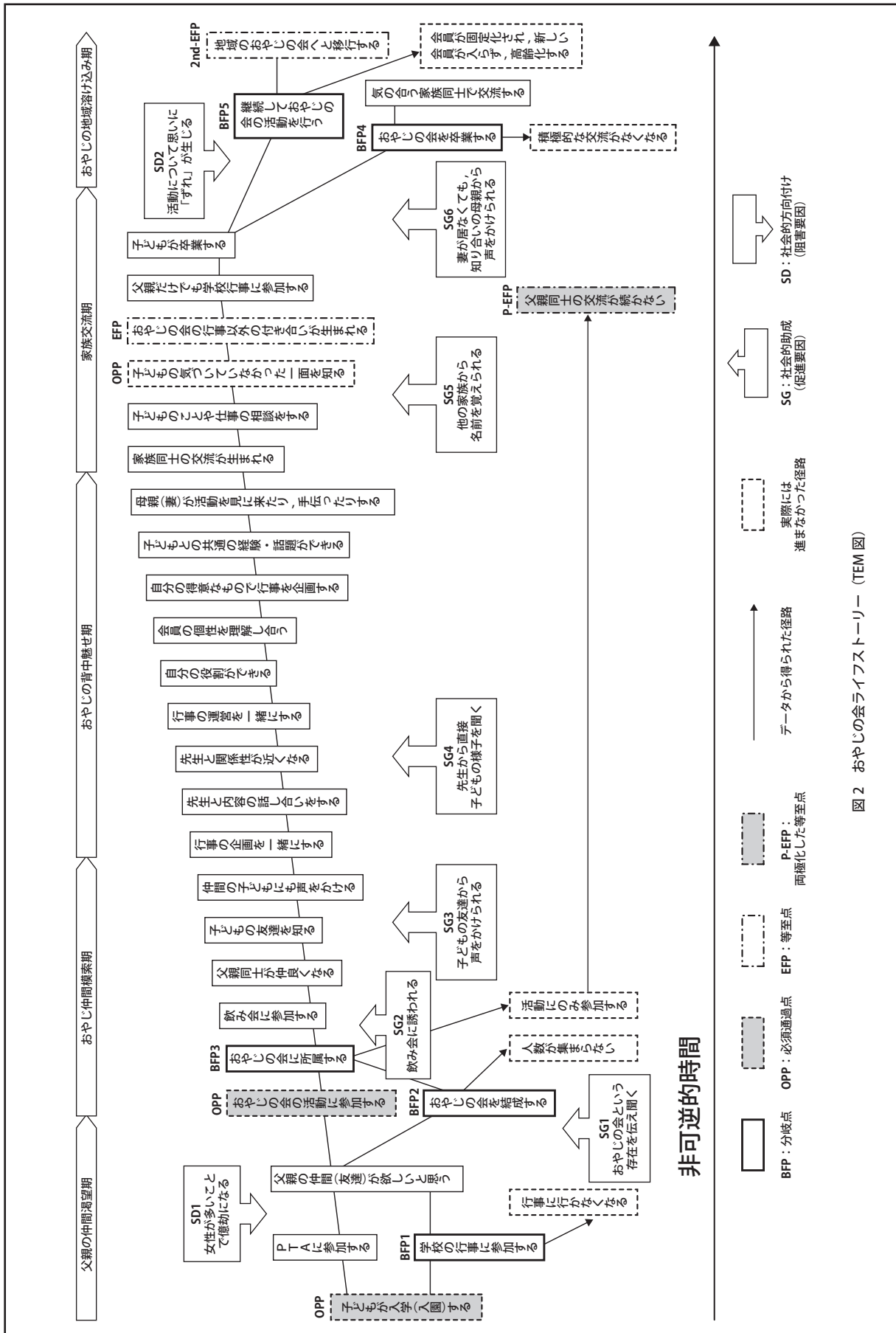


図2 おやじの会ライフストーリー (TEM図)

第二期【おやじ仲間模索期】

次に会へ参加若しくは結成し、仲間を集めていく。その際に重要になるのは“飲み会”である。すでに以前から知り合いであれば関係性を近づけるのは容易ではあるが、初めて出会った人であれば、何かきっかけが必要となる。最初は、次の行事のことを話すが、『その担当者が全部決まって、今どんな感じで進んでるとか、すごい真面目な会。これ、お酒ないやん、今日って思ってたら、いきなり話が終わったら七輪が出てきて。』のように、すべきことが終われば、[父親同士が仲良くなる]ために、交流を深めるのである。“お酒”という力を借りて仲良くなれるのであれば、重要なツールと考えられる。そして、仲間関係ができていく中で、それぞれの【子どもの友達を知る】と子どもの名前と顔が一致し、互いに認識するようになり、話題も増えていき、親同士だけではない家族としての関係性が深まっていく。活動を通して学校へ足を運ぶようになり、『おる時は全園児覚えてたろうと思ったもん。結局覚えられへんかったけど。でもそれぐらいの名前を、全園児の名前を覚えてたろうと。クラスは覚えてけどなあ。-中略-おやじやってから、自分の子どもだけじゃない、うちの子はどういう友達関係してるかなとか。』や『知り合いの子どもが増えるよね。それは嬉しいよね。幼稚園行ってもAさんと言ってくれる子がいっぱいおったらやっぱり嬉しいし、よりなんかしてやろうと思うもんね。活力になる。』とあるように、結成時に“仲間を求めた”状況から父親の仲間ができたことで、“仲間の子も達も大切にしたい”という思いに変容した。

父親達が相互に声をかけ合うことで、“自分の子どものため”から“知っている子ども達のため”と目的が広がっていく。再度、飲み会を通じることで、さらに、おやじ達の関係性は深くなる。

第三期【おやじの背中魅せ期】

活動を行う中で、[行事の企画を一緒にする]や[自分の役割ができる]、[自分の得意なもので行事を運営する]を通してそれぞれの役割が生まれたり、学校との連携を必要としたりして、子どもの理解も深まる。学校に行くことで、『やっぱり近くにいると先生から少し聞こえる「息子さんはこうでしたよ。ああでしたよ」っていうのが正直嬉しいですね。あの、母親を通して僕に言われるよりもダイレクトに言われた方がまありアルではないですけども、フィルターが通ってない分嬉しい。』とある。以前は母親を通して聞いていた子どもの情報を、直接聞くようになり、そこで“やりとり”が生まれる。[先生と関係性が近くなる]ことで、情報の質は向上し、理解が深まる。その反面、気を付けておかなければいけないのが先生や友達の認識が“〇〇さんのお父さん”だったのが“〇〇さん”と一個人へと変化することである。多感な時期の子どもにとって、複雑な心境をもたらすことになるケースもあった。そのため、普段から子どもとやりとりをする中で、我が子の性格を十分に理解した上で、関係性を保てるように関わる必要がある。

活動が盛んになり、様々な活動を行う中で『やっぱり結局そこですごく尊敬できる先輩とかがいて、ちょっと付き合っていくうちに、この人いいやんとか、憧れるじゃないけど、こんな大人になりたいねみたいな。』とあり、普通では関わりがなく、父親として一人の人間として“憧れ”を持つ人と出会い、関係性を深めていく。父親が他の父親に憧れを持っている姿を家族が見る事も大事である。憧れをもたれた親の子どもは、父親のことを誇りに思い、親が憧れている姿を見た子どもは、自身もその親に対して興味関心を持って関わるようになる。そして、『学校に行っておやじの背中を見せれたからと、前も後ろも見せれたかなと。そういう姿を見てるからこそ、おやじがよく学校に来て何

かやってる。家庭でも、やっぱりいろんな話をして、今でも、中学、高校、社会人になっても仲良く。それは、逆におやじの会で活動してきたからこそ、そうやって、うちのおやじの背中を見せてきたからこそ、娘たちはそんなに感じてるのかな』のように、包み隠すことなくありのままの姿を家族に魅せることで、家族は親近感を持つ。そして、家庭だけでは体験できなかったことも経験するようになり、[子どもとの共通の経験・話題ができる] ことにつながる。また、家族を対象とした行事も行うようになり、[母親(妻)が活動を見に来たり、手伝ったりする] ことになる。元々、家族で連携して色々なことに取り組んでいる例ではあるが、『それも同じノリで、おやじの会でもきちんとコラボレーションはしとったと思うんやけど、よく手伝ってくれとったな』のように母親もおやじの会に手伝いという形で関わるようになり、“父”と“子ども”だけでなく、家族同士が関わるようになる。ありのままの背中を魅せることで、家族や仲間を注目させ、楽しいという思いを生み出し、家族で参加するようになっていた。

第四期【家族交流期】

父親と子どもが繋がっていく中で、[家族同士の交流が生まれる] のように自然と母親も関わる事が増えていく。家族同士を認識し合う段階になり、コミュニケーションの輪が広がっていく。その中で、家族同士が関わる事も増え、会の活動以外の場においても出会えば挨拶やコミュニケーションを取るようになる。父親が関わったことで、家族と家族をつなげることは容易になる。何故なら、元から母と子ども同士はつながっていることが多い。母親は、子どもが父親と参加する様子を見に来ることも多いため、そこで父と子の出会いが生まれてもすぐにつながり、回数を重ねる中でより強固なものになる。地域に住む人同士が家族としてつながることは、『結果的に家族が住みよくなったとい

うか。地元の人より地元っぽいって言われる。』のように、家族でつながった絆は地域に住む住人にとって重要なものとなる。

つながりが増えることは、[子どものことや仕事のことの相談をする] ともあるように、『自分の子育てを見つめなおすということにはなるかなあ。聞くやん、どういうのしてるとか。子育てというのは結構自分のとこが常識やから。隣は隣の人の育て方があるけど、そんなの聞けへんやん。なんか色々こうしてるとか、どうしてはりますのんとか言うな、しょちゅう話はせんけど、多分お母さんほど話せえへんけど、なんかの時にふっと聞いたり、うちはほったらかしやでとかなんか色々言うたりするけど、そういうのと自分とを比べる。どっちが正しいとかではなくて、そういうやり方もあるんかあとか。』と聞きやすい関係性を作る。この話にもあるように、自分の子育てに関する価値観を否定するのではなく、他の人の在り方を聞きながら、要素を取り入れ、より良い子育ての在り方を模索することができる。家族が交流しているからこそ、それぞれに相手の家庭の様子を思い描きながら話すことができるため、素直に受け入れられるのだろう。

家族でのつながりができたということは、知り合いができるということである。すると、“父親の仲間”に固執せずとも、知り合いの母親や子どもの友達もいるため、学校の行事に対して気楽に参加することができる状況になった。そして、そのような状況が当たり前になると、『そしたら子ども嬉しい。お父さんと幼稚園なんか特に寄ってくる。お父さん、お父さん。そしたら子どもにしたら鼻が高い。私のお父さん、僕のお父さんみたいな感じですよ嬉しいねんな。そんで見てもらいたいのもあるし、だから張り切るし、僕もずっと行ってるからあれやけど、子どもを見てると恥ずかしそうにしてるけど、ちょっと鼻が高い。』にもあるように、子ども自身も誇らしい状況になり、子ども

との関係性も良好になる。

第五期【おやじの地域溶け込み期】

長年活動を行う中で、[子どもが卒業する] ことになり、子どもの卒業に伴い、[おやじの会を卒業する] ようになる。卒業の後はOBになるケース、辞めてしまうケース、若しくは2nd - EFPである[地域のおやじの会へと移行する]等継続して関わるケースと様々なことが起こり得ている。しかし、おやじの会の関わりがなくなったとしても、そこで、出会ったつながりが消えることは無い。その後も地域に住む一住民として関わりは継続している。おやじの会が解散した後ではあるが『普通あれだけの家族(約15家族)でキャンプいく?』とあるように、会の場所はなくなっても交流は続いていることが分かる。また、『絶対いややとか言うところあると思うねんけどな、あんだけ参加するか?って思うもん。ちゃんと子どもも来るしな。』のようにおやじ達だけの自己満足ではなく、家族同士の交流が続き、子どもが高校生や大学生等大きくなっても一度つながった絆は切れることなく関わり続けている。

また、拠点を地域に移し、継続的に関わり続けている場合の思いは『俺、自分の姿を見せて、自分たちの子どもが大人になったときに、結婚してまたその子どもたちに、息子たちの子どもに、おんなじような地域で頑張るお父さん。うちのおやじは、小学校のときに、ああやっておやじの会なんか作って活動、学校のために、子どもたちのために頑張ってたよね。』とあるように、子どもに親として伝え続けたい思いが垣間見られる。持続可能な環境のためには、“地域”という場所は学区よりも望ましいのかもしれない。また、おやじの会が解散したり、OBとして会との距離が遠ざかったりしても、地域に住むものとして関わっている。栗山(2008)⁽¹⁶⁾は、高齢者もその能力を社会で発揮し続け、他人から必要とされる存在であると確

認することで孤独感から解放され、世代間交流は地域全体の利益になると示唆している。このように、関わった子どもからも認知されていることは、大人の視点に立ったとしても、意味があるだろう。そして、『定年後に地域に、じゃあ、ってなっても、ちょっと遅いというか、溶け込んでない。だから、今の社会人として働きながらも、今の時点でいろんな地域活動、ボランティア活動にしてもコミュニケーション取っておれば、自分が65、70で定年したときに、何かしら地域の方々とコミュニケーション取れる。』と語られたように、おやじの会の活動を継続して行うことで、【おやじの会を卒業する】と【継続しておやじの会の活動を行う】のどちらにおいても、地域に溶け込み、相互に関わりを継続させることができている。

おやじの会の父親の意識の変容について：TLMG図の分析

図3は、研究協力者のTLMG図の意識の変容を可視化したものである。研究協力者の意識は出来事によって随時変容し、経験が積み重なっていくことで、こうありたいという自分像の意識が発生する。その意識が、新たな行動へと導く可能性が示唆された。行動レベルを第一層とし、分岐点となった5つの経験をおいた。インタビュー内容から意識レベルを第二層とし、行動に対する意識を抽出した。第三層の信念・価値観レベルは、研究協力者がこうありたいと思う価値観を記述した。

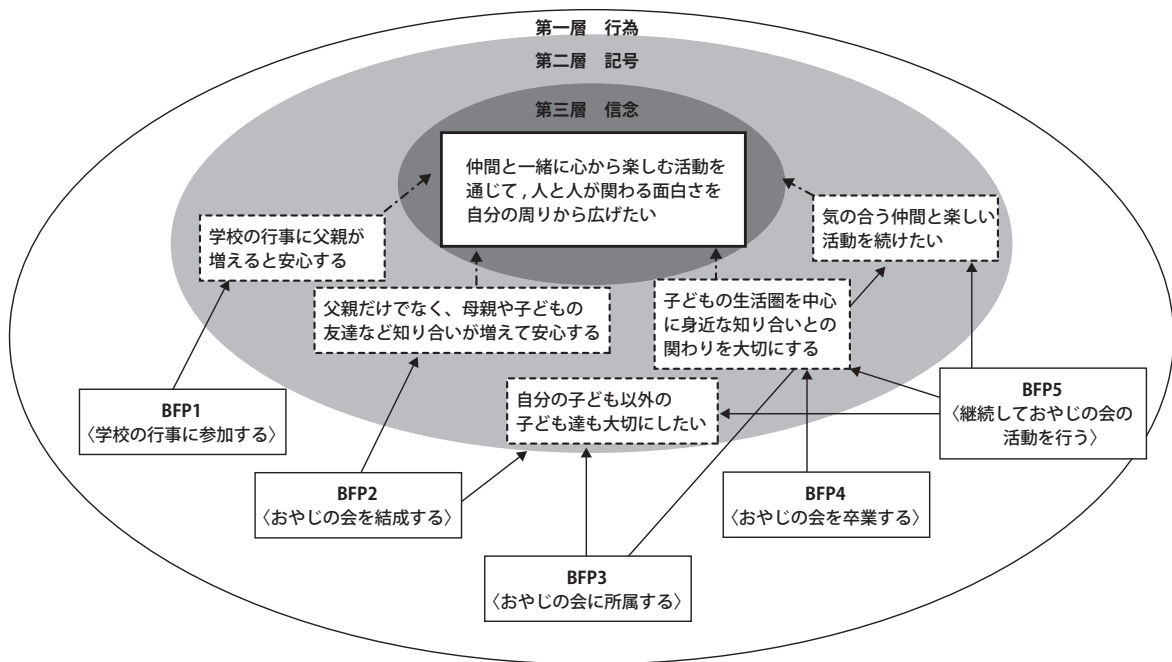


図3 発生の三層モデルで可視化した研究協力者の意識の変容 (TLMG 図)

当初は、[BFP1：学校の行事に参加する] 中で、“父親の仲間を増やしたいという思い”があった。それは、自分が少数派のため目立つことやPTAの役員等になることをマイナスに思っており、[学校の行事に父親がいると安心する] 状況を作り出したかった。つまりは、自分のためであった。しかし、[BFP2：おやじの会を結成する] 若しくは既存の会に参加したことにより、[父親だけでなく母親や子どもの友達等知り合いが増えて安心する] 思いを持つようになった。さらに、[おやじの会に所属する] ようになり、子どもの友達や仲間になった父親の子どもとの関わりが増えることで、[自分の子ども以外の子ども達も大切にしたい] というように思いに変容が生まれた。しかし、おやじの会の活動を継続して数年に渡って行う中で、状況はそれぞれに変容する。学校という性質上、子どもが卒業することは必然である。それに伴いOBとなるのか、継続して参加できるのかは、それぞれの団体の在り方による。基本的には、OBとなるケースが多い。おやじの会から離れても[子どもの生活圏を中心に身近

な知り合いとの関わりを大切にする] ことは続いたり、[BFP5：継続しておやじの会の活動を行う] 中で[気の合う仲間と楽しい活動を続けたい] という思いの基で活動を続けたりしていた。数年の活動を行う中で、近接地域との交流が生まれる場所もある。そうすると、2nd - EFPである[地域のおやじの会へと移行する] ケースもある。おやじの会に所属していなかったとしても、地域に溶け込み関わるようになる。それは、『楽しいんだよとか面白いんよとかっていう。そこを分かるか分からないかっていう感性だよ。その感性がやっぱりおやじの会に入って、いろんな人たちと会って磨かれたっていうか。より高いレベルに押し上げてくれた』とあるように、[仲間と一緒に心から楽しむ活動を通じて、人と人が関わる面白さを自分の周りから広げたい] という思いを持つからである。この気持ちの変容こそがおやじの会の魅力であり、強制力のない人と人のつながりが子育て環境として有用であると考えられる。そのつながりによって、父親が地域に溶け込み継続して身近な所に関わり続けるのである。

全体的考察

本論では、おやじの会の父親達に時間の流れのなかから、どのように意識が変容していくのかというプロセスに視点を当て、各期の特徴をTEM図、TLMG図から分析してきた。その結果、父親達の意識は【父親の仲間渴望期】で仲間を求め、【おやじ仲間模索期】で仲間を作ることを模索し、第三期【おやじの背中魅せ期】で仲間と共に活動を行い生き生きとした姿を魅せ、第四期【家族交流期】で家族同士の絆を深め、第五期【おやじの地域溶け込み期】でおやじの会継続の有無に関わらず地域に住むものとして関わりを持つように変容していることが分かった。吉川(2018)⁽¹⁷⁾は、“地域”の人材が関わりながら子育てを行うことで、子ども達は地域に愛着を持つこと、楽しい時間を持つことで地域と自分の関係を再認識すると示唆している。おやじ達は仲間と共に活動を行う中で、“同じ思いの仲間と共に活動する”喜びに触れ、“家族とともに仲間と過ごす時間”に満足感を持ち、“地域に住む子どもの笑顔”に酔いしれている時間がおやじの会の魅力となっているのである。“地域”を拠点にすることで、その身近な場所で自分の“居場所”ができる。そこで活動することこそ、父親達の様子を見た、子どもと家族も同じように心惹かれる場所となるのだろう。巽(2018)⁽¹⁸⁾は「父親が職場以外の領域に居場所を得るためには、何が重要なのだろうか。これには、その領域に自分の気持ちを理解してくれるメンバーがいるとともに、自分自身の役割を得ることが重要である。」と述べており、おやじの会は居場所作りに必要な“仲間”と“役割”を与えていることが分かる。その“仲間”と“役割”があるからこそ、父親を含め、おやじの会に関わる人々は、何年にも渡って持続していると考えられる。結果として、おやじの会を契機として父親を含めた家族は“地域に溶け込み”、その結果、おやじの会は子育て環境としての居場所を生み出している。

子育て環境としてのおやじの会という居場所

父親達は[子どもが学校に入学(入園)する]段階で、[学校行事に参加する]や[PTAに参加する]という行動を親として求められるようになった。柏木(1995)⁽¹⁹⁾が、「子育てによって子どもが発達していくことはいうまでもありません。子どもの発達を願って親は子どもを育てるのですが、しかし、その子育てをする親の側にも発達がある、そのことを経験的に認めざるをえない、「育児は育自」といわれるゆえん」と述べるように、子育てをする中で親も親として育てられる。子どもが学校という場所に入ったことでおやじの会と出会うきっかけをもらう。子どもがもたらしてくれた縁を基に、親達は成長するきっかけを得る。子どもがきっかけとなって縁をもたらししたことによって、父親達はおやじの会という居場所を得る。そして、その居場所が“仲間”と“役割”をもたらし、子育て環境として安心感をもたらし場所となる。さらに、その居場所は活動を行う中で、居場所に属する人を増やしていく。最初は、関わる父と子どもだけだったものが、母親も関心を持つようになり、学校及び地域に住む人々の中で興味を持つ新たな家族も参加するようになる。居場所としての安心感に関わり方によって個人差はあるが、それぞれにとっての“役割”を持つ。

筧(2019)⁽²⁰⁾は地域の役割について10年以上持続させることが重要だと語っている。それは、地域という居場所の中で、地域に住む人々が育て合い、子育てをする環境が整っていく。協力者それぞれのおやじの会の現状から見ても全てのおやじの会の人々が“地域のおやじの会”に移行しているわけではない。しかし、“地域に溶け込み”、地域の一住民として地域の子どもや大人達に「心」を向けて関わるようになる。それは、おやじの会という居場所がもたらした“仲間”と“役割”を得て、変化したことである。その変化は父親だけで留まるものでもな

い。おやじの背中を見ながら、共に歩んできた子ども達は、成長に伴いおやじの会の運営側に関わるようになっていく。つまり、子ども達もその居場所を好んで関わり、さらに、新しく関わるようになった子どもとその父親を含んだ家族に、様々な影響をもたらすようになる。また、その成長して関わる子どもの姿を見た父親もその様子を見て喜びを得るとともに、「できる人ができる時に」というおやじの会の共通の理念の基、関われる範囲で関わっている。つまり、おやじの会という居場所がもたらす“仲間”と“役割”は一義的なものではない。それぞれに与える影響に差はあるが、地域という生活圏にある身近な場所でそこに住む家族にとって影響を与え続けている。加藤(2015)⁽²¹⁾は、子育ては自分達だけがするものではなく、身近な人が声をかけられることで、共に大切と思ってくれる人がいることが重要だと述べているが、子育てに限らず、親育てにおいても同様ではないだろうか。父親である自分自身も含めて、家族として相互に思い合う場所だからこそ、子育て環境としては望ましいものである。M. J. イライアス(1999)⁽²²⁾は子どもが属する社会の最も重要な部分は家族であり、家庭と学校が協力すると、プログラムは長く持続すると語っている。家族という単位で学校と地域と関わることで、より強力な関係で持続すると言えらる。子育て環境として、家族としての“自助”の力を向上しながら、“共助”として仲間を助け、安心感を与えながら、共に向上することで、持続可能な子育て環境に変容していくと考えられる。

おやじの会が紡いだ、仲間との関係性は、年数と共により味わい深いものに醸成される。その関係性を築き、深めていくことが子育て環境としてのおやじの会の意義があると考えられる。

今後の課題

本調査によって、おやじの会に所属した父親の意識の変容が明らかになった。その中で調査

対象者の父親達は【おやじの地域溶け込み期】に移行し、おやじの会の所属の有無に限らず、地域に住むものとして関わりを継続させている。本研究では兄弟姉妹の存在や幼・小・中に跨るおやじの会に長期間関わった会員を対象にしたため、地域への波及も垣間見ることができた。しかし、おやじの会参加者の実態として、短期間しか関われないケースや会員にはならず、行事に参加するケース、時代の変化に伴い女性の参加等もあるため、様々な属性のTEMを描くことで、課題や可能性を整理する必要がある。

おやじの会は、時代の変化の中で父親に限定されない団体になっていた。“おやじ”の意味も父親を指す言葉ではなくなり始めている。“親路”という表記で、親の路を歩むものとして、様々な活動が行われている。それぞれの立場で、重層的なものにしていくことが課題と言えらる。

文献

- 1) こども基本法(2023/4/11にアクセス)
<https://www.cfa.go.jp/policies/kodomo-kihon/>.
- 2) 山縣文治(2002)『現代保育論』ミネルヴェ書房.
- 3) 加藤邦子, 牧野カツコ, 井原成男ほか(2015)『子どもと地域と社会をつなぐ家庭支援論』福村出版.
- 4) 薄葉豊(2006)「おやじたちは今-「おやじの会」に見る男縁の再構築-」『東北人類学論壇』5, pp 52-69.
- 5) 上田圭恵(2007)「学校と家庭の連携のあり方に関する一考察-H県H市の「おやじの会」の事例を中心に」『教育学研究紀要』53, pp181-186.
- 6) 平田裕美(2005)「父親の会」活動の意義と機能」『子ども社会学研究』11, pp86-99.
- 7) 京須希実子, 橋本鉦市(2006)「おやじの会と父親の育児参加(1)-グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析の試み-」『研究年報』55, pp157-179.
- 8) 安田裕子, サトウタツヤ(2012)『TEMでわかる人生の経路-質的研究の新展開-』誠信書房.
- 9) 安田裕子(2015)「コミュニティ心理学におけるTEM/TEA研究の可能性」『コミュニティ心理学研究』19, pp 62-76.
- 10) サトウタツヤ, 安田裕子(2022)『TEAによる対人援助プロセスと分岐の記述』誠信書房.
- 11) 前掲(8).
- 12) 前掲(8).
- 13) 荒川歩, 安田裕子, サトウタツヤ(2012)「複線経路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例」『立命館人間科学研究』25, pp95-107.
- 14) 前掲(10).
- 15) 前掲(9).
- 16) 栗山昭子(2008)『世代間交流-家庭教育の一環として-』ふくろう出版.
- 17) 富田久枝, 上垣内伸子, 田爪宏二ほか(2018)『持続可能な社会をつくる日本の保育乳幼児期におけるESD』かもがわ出版.
- 18) 巽真理子(2018)『イクメンじゃない「父親の子育て」』晃陽書房.
- 19) 柏木恵子(1995)『子どもと教育親の発達心理学-今, よい親とはなにか-』岩波書店.
- 20) 寛裕介(2019)『持続可能な地域のつくり方-未来を育む「人と経済の生態系」のデザイン』英治出版.
- 21) 前掲(3).
- 22) M. J. イライアス, 小泉令三(1999)『社会性と感情の教育-教育者のためのガイドライン39-』北大路書房.

謝辞

本研究に協力して下さった各地のおやじの会の皆様, 縁をつないで下さった全国おやじサミットの関係者の皆様により感謝御礼を申し上げます. また, 中国学園大学・中国短期大学副学長住野好久先生は, いつも論文の質が高まるようにご助言ご指導くださったことを心から感謝しております.

付記

本研究はJSPS科研費21K20252の助成を受けたものである.

【 事 例 報 告 】

スタンディングマシンの 新しい使用法による生産性向上効果 A 介護老人福祉施設の取組事例から

Productivity gains from new use of standing machines
A Case Study of Efforts at a Nursing Home for the Elderly

森田 裕之

Hiroyuki Morita

中国短期大学 総合生活学科
Chugoku Junior College,
Faculty of General Life Sciences

大野 倫由

Tomoyuki Ohno

ノーリフトリハ研究会 代表
Nolift-reha Representative

キーワード

生産性向上 スタンディングマシーン 業務効率化 業務改善
Increased productivity / standing machine / business streamlining / business improvement

要 旨

日本の介護産業の労働力不足は、今後ますます深刻化することが予想されており、介護分野における生産性の向上が最重要課題となっている。この課題に対しスタンディングマシーンを使用した研究において、複数台を同時に使用することで、量的な効率化を行えることが明らかとなっている。しかし、先行研究では前述の研究以外に、スタンディングマシンの使用が生産性向上につながるという研究は見られない。本研究の対象施設であるA介護老人福祉施設では、移乗手段としてスタンディングマシーンを使用していたが、移乗に時間がかかるという理由で、介護職員から不満が出ていた。試行錯誤の結果、従来のスタンディングマシンの使用目的である移乗に、移動と座位保持を加えることで、スタンディングマシンのスリングの着脱回数を3回から1回に減少させることが可能となった。本研究では、このスタンディングマシンの新しい使用法により、介助手順の省略に成功した事例を報告する。その中で、従来のスタンディングマシンの使用法と、新しいスタンディングマシンの使用法を比較し、手順省略の具体的な内容を明らかにする。また、手順省略以外に、どのような生産性向上がなされているかを考察する。本研究はスタンディングマシンの普及と介護分野における生産性向上に

寄与すると考える。

The labor shortage in Japan's nursing care industry is expected to become increasingly severe in the future, and improving productivity in the nursing care sector is a top priority. In a study using standing machines to address this issue, it was found that the use of multiple machines simultaneously can improve efficiency quantitatively. However, no previous studies have shown that the use of standing machines leads to increased productivity, other than the studies. At Facility A, the nursing care facility for the elderly that is the subject of this study, a standing machine was used as a means of transferring patients, but the nursing care staff complained that it took too much time to transfer the patients. As a result of trial and error, it became possible to reduce the number of times a standing machine sling is attached and removed from the patient from three times to once by adding movement and sitting position retention to transfers, which is the purpose of using a conventional standing machine. In this study, we report a case in which this new method of using a standing machine successfully reduced the number of assistance procedures. We compare the use of the new standing machine with the use of the conventional standing machine, and clarify the specifics of the procedure omission. In addition to the procedure omission, what kind of productivity improvement has been achieved is also discussed. We believe that this study will contribute to the diffusion of standing machines and the improvement of productivity in the field of nursing care.

1. 背景

産業の労働力不足は、今後ますます深刻化することが予想されている¹⁾。そのため、介護労働者一人あたりの生産性をいかに引き上げるかということが、介護産業における最重要課題となっている。厚生労働省は、介護分野における生産性向上推進フォーラム²⁾の実施や、介護産業の生産性向上の先進事例を集めたガイドライン³⁾を公表する等、生産性向上の普及に努めている。

厚生労働省は、介護産業の生産性向上の先進事例を集めたガイドラインの中で、生産性向上を質の向上と量的な効率化の2つの視点から捉えている。質の向上は、業務の改善活動を通じて、ケアに直接関係する業務時間の割合増加や内容の充実を意味し、量的な効率化は、業務の質を維持・向上しつつ、ムリやムダのある作業

や業務量（時間）を減らすことを意味している。本研究では、厚生労働省のガイドラインに準じ、質の向上及び量的な効率化を生産性向上と定義する。

量的な効率化に該当する、利用者の介助にかかる時間を省略することは容易ではない。そもそも利用者に直接かかわる業務は、利用者の身体的・精神的な状況を踏まえつつ、尊厳の保持や自立支援等を加味した利用者本位の介助を行う必要があるため、介助手順を省略するという発想が育ってこなかったと思われる。

このような課題に対し、先行研究では、スタンディングマシーン（以下SMと表記する）を複数台同時に使用することで、トイレ介助にかかる時間を省略し、量的な効率化を行えることが明らかとなっている⁴⁾。

SMは、利用者の腰部と膝を支えることで、

座位からの立ち上がり・方向転換・着座を補助する移乗を目的とした福祉用具である(図1)。SMは本体(図2)と吊り具に該当するスリング(図3)がある。SMの効果として、介助者の身体的負担の軽減を示すものが多い^{5) 6)}。SMは生産性向上や介助者の身体的負担の軽減といった効果があるが、介護老人福祉施設等の施設系(入所型)でのSMの導入率は13.7%と低い⁷⁾。13.7%という導入率には、SMだけでなく移動用リフト全般を含むため、SMのみの導入率はさらに低くなると思われる。導入率が低い理由として「吊り具(スリング)の装着に手間・時間がかかる」や「リフト本体の操作に手間・時間がかかる」ことが指摘されている⁸⁾。しかし、SMの介助手順を省略するような方法に関する研究は、前述の研究以外は見られない。

このような状況の中、A介護老人福祉施設では、パーキンソン病で体重の重い利用者を、ベッドから車椅子・車椅子からトイレ(便座)に移乗する手段として、SMを使用していた。しかし、移乗に時間がかかるため、介護職員から不満が出ていた。試行錯誤の結果、従来のSMの使用目的である移乗に、立位移動と座位保持を加えた。それにより、SMの着脱回数を3回から1回に減少させた介助方法を確立した。

本研究では、トイレ内だけでSMを使用するのではなく、ベッドからトイレまでの介護業務の流れの中でSMを使用するという新しい使用方法によって手順の省略を行い、生産性向上に成功した事例を報告する。その中で、従来のSMの使用法と、新しいSMの使用法を比較し、手順省略の具体的な内容について明らかにする。また、手順省略以外に、どのような生産性向上がなされているかを考察する。



図1 スタンディングマシンの使用例(移乗)



図2 スタンディングマシン本体



図3 スリング(吊り具)

II. 方法

1. 研究対象者

1) A介護老人福祉施設で普段SMを使用している利用者

【利用者状況】

性別：女性 年齢：80歳 病名：パーキンソン病，脳内出血後遺症，てんかん

障害名：四肢麻痺（パーキンソン病），左片麻痺（重度），振戦，構音障害，立位歩行障害

要介護度：5 高齢者日常生活自立度：B2 認知症高齢者日常生活自立度：I

ヤール分類：V度（一人で起立歩行不可）

選定理由：普段からSMを利用しており，研究協力の同意を得られたため選定した。

2) B機能訓練士

A介護老人福祉施設で機能訓練士として勤務している。

性別：男性 年齢：50代 業務従事経験：28年
資格：理学療法士

選定理由：今回のSMの使用方法は，利用者が立位の状態で移動するため転落等への安全面に配慮が必要である。また，介助手順を一定の動作で行う必要があるため，SMの使用に熟達したB機能訓練士が，SMの全般的な使用を担当するため選定した。

3) C介護職員

A介護老人福祉施設で，介護職員として勤務している。

性別：男性 年齢：20代 業務従事経験：2年
資格：介護福祉士

選定理由：研究対象者（80歳女性）に信頼されており，また，スタンディングマシンの使用した状態でのズボンの上げ下ろし方法に習熟している。トイレ内の付き添いや利用者のズボンの上げ下ろしを担当するため選定した。

4) 使用した福祉用具

スカイリフトSL-2009U（アイソネック社），
エアスリングAS-201（アイソネック社），
セミモジュール自走式車椅子 AR-901（松永社）

2. 実験手順

1) ビデオ撮影

本研究では，A介護老人福祉施設で行われていた従来のSMを使用した介助方法（以下，「旧SM法」とする）と，現在A介護老人福祉施設で開発された新しいSMのトイレ介助方法（以下，「新SM法」とする）を比較する。どちらも自室のベッドで臥床している利用者の移乗から始まり，トイレ介助を経て，ホールのテーブルへの移動までを一連の動作とし，3カ所の固定カメラで撮影した。実験会場の状況は図2の通りである。なお，本研究事例における新SM法は，SMを製作するアイソネック社に報告している。メーカーが想定していない福祉機器の使用法は重大な事故につながる可能性があるため，安全性を確保した状態で使用することに留意する必要がある。

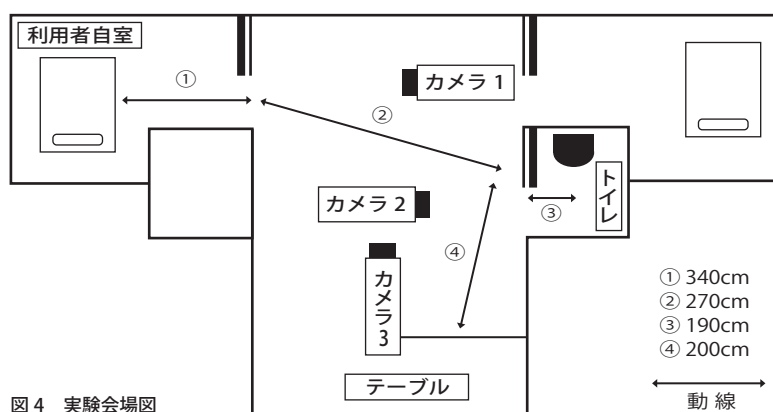


図4 実験会場図

3. 旧SM法の手順

B機能訓練士及びC介護職員からヒアリングした内容を整理し、旧SM法の手順表を作成した(表1)。なお、車椅子やSMのブレーキ操作

については当然行っているものとして、手順表には記載していない。また、手順表に沿って時間を計測しているが、項目10のトイレ内での排泄に関しては、時間を計測していない。

表1 旧SM法の手順表



項目	場所	利用者体位	旧SM法手順	
1	自室	臥位→端座位	臥床している利用者を端座位にし、靴を履かせる。	
2	自室	端座位	スリングを装着し、SMを差し込み準備する。	
3	自室	端座位→SM立位→車椅子座位	SMで立位介助し、移乗後に車椅子に座る。	
4	自室	車椅子座位	SMとスリングを取り除き、フットサポートを装着する。	
5	自室→トイレ前	車椅子座位→車椅子移動→車椅子座位	トイレ前まで車椅子で移動し、車椅子座位で待機する。	
6	トイレ前	車椅子座位→SM立位→SM移動→SM立位	スリングを装着し、SMを差し込み準備する。	
7	トイレ前→トイレ内	SM立位→SM移動	SMで立位後にトイレ内に移動し、便座前でSMの立位保持で待つ。	
8	トイレ内	SM立位→トイレ座位	SMの立位保持の状態で下衣を脱衣し、便座に座る。	
9	トイレ内	トイレ座位	SMとスリングを取り除く。	
10	トイレ内	トイレ座位	排泄(座位が不安定であるため介護職員が付き添う)。	
11	トイレ内	トイレ座位	スリングを装着し、SMを差し込み準備する。	
12	トイレ内	トイレ座位→SM立位	SMで立位保持を行い、下衣の着衣を行う。	
13	トイレ内→トイレ前	SM立位→SM移動→車椅子座位	SMで立位後に、車椅子まで移動し車椅子に座る。	
14	トイレ前	車椅子座位	SMとスリングを取り除き、フットサポートを装着する。	
15	トイレ前→ホール	車椅子座位→車椅子移動→車椅子座位(ホール)	車椅子でホールの自席に移動する。	

4. 新SM法の手順

B機能訓練士及びC介護職員からヒアリングした内容を整理し、新SM法の手順表を作成した(表2)。なお、車椅子やSMのブレーキ操作

については、当然行っているものとして、手順表には記載していない。また、項目5のトイレ内での排泄に関しては、時間を計測していない。

表2 新SM法の手順

項目	場所	利用者体位	新SM法手順
1	自室	臥位→端坐位	臥床している利用者を端坐位にし、靴を履かせる。
2	自室	端座位	スリングを装着し、SMを差し込み準備する。
3	自室→ トイレ前	端坐位→SM立位→ SM移動→SM立位	端坐位の利用者をSMで立位介助し、そのままトイレの便座まで立位移動する。 
4	トイレ内	SM立位→トイレ座位	SMの立位保持の状態の下衣を脱衣し、便座に座る。
5	トイレ内	トイレ座位	排泄。 (スリングを装着した状態で座っているため、転倒の危険が少ないことから、介護職員の付き添いが不要になる) 
6	トイレ内	トイレ座位→SM立位	SMで立位保持を行い、下衣の着衣を行う。
7	トイレ内→トイレ前	SM立位→SM移動 →車椅子座位	SMで立位後に、車椅子まで移動し車椅子に座る。
8	トイレ前	車椅子座位	SMとスリングを取り除き、フットサポートを装着する。
9	トイレ前→ホール	車椅子座位→車椅子移動 →車椅子座位(ホール)	車椅子でホールの自席に移動する。

5. 研究期間

本研究は、2023年2月に実施された。

6. 倫理的配慮

研究協力者及びA介護老人福祉施設の施設長には、本研究への協力は任意であり、参加しなくても不利益がないことを文書で保証した。以上の研究計画は、著者が所属していた大学研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号：18940-221110）。開示すべき利益相反はない。

III. 結果

ビデオ撮影を行った旧SM法と新SM法の手順を比較すると、旧SM法が15の手順であるのに対して、新SM法は9つの手順であった（表3）。これはSMのスリングの脱着を省略してい

ることが大きな要因である。具体的には、旧SM法では①ベッドから車椅子、②車椅子から便座、③便座から車椅子の3回の移乗を行う必要があり、スリングの脱着も3回必要であった。対して新SM法では、ベッドでSMを使用して立位になった後、SMのままトイレまで移動し、SMのまま便座で座位になりSMのまま車椅子まで移動しているため、スリングの脱着が1回に減少している（表3）。なお、あくまで目安だが、本研究では旧SM法の所要時間が7分8秒、新SM法の所要時間が4分4秒であり、3分4秒の時間が短縮されていた（表4）。

このように、スリングの脱着回数が減少したのは、SMの使用目的をベッドから車椅子といった移乗のみで捉えるだけでなく、自室からトイレといった移動と、便座での座位保持を加えたことが要因として挙げられる。

表3 旧SM法と新SM法のスリング脱着回数の比較

項目	旧SM法手順	スリング	新SM法手順	スリング
1	臥床している利用者を端坐位にし、靴を履かせる。		臥床している利用者を端坐位にし、靴を履かせる。	
2	スリングを装着し、SMを差し込み準備する。	着	スリングを装着し、SMを差し込み準備する。	着
3	SMで立位介助し、移乗後に車椅子に座る。			
4	SMとスリングを取り除き、フットサポートを装着する。	脱		
5	トイレ前まで車椅子で移動し、車椅子座位で待機する。			
6	スリングを装着し、SMを差し込み準備する。	着		
7	SMで立位後にトイレ内に移動し、便座前でSMの立位保持で待つ。		端坐位の利用者をSMで立位介助し、そのままトイレの便座まで立位のまま移動する。	
8	SMの立位保持の状態の下衣を脱衣し、便座に座る。		SMの立位保持の状態の下衣を脱衣し、便座に座る。	
9	SMとスリングを取り除く。	脱		
10	排泄（座位が不安定であるため介護職員が付き添う）。		排泄（スリングを装着した状態で座っているため、転倒の危険が少ないことから、介護職員の付き添いが不要になる）。	
11	スリングを装着し、SMを差し込み準備する。	着		
12	SMで立位保持を行い、下衣の着衣を行う。		SMで立位保持を行い、下衣の着衣を行う。	
13	SMで立位後に、車椅子まで移動し車椅子に座る。		SMで立位後に、車椅子まで移動し車椅子に座る。	
14	SMとスリングを取り除き、フットサポートを装着する。	脱	SMとスリングを取り除き、フットサポートを装着する。	脱
15	車椅子でホールの自席に移動する。		車椅子でホールの自席に移動する。	

表4 本研究における旧SM法と新SM法の所要時間の差

旧SM法手順に要した時間	新SM法手順に要した時間
7分8秒	4分4秒
所要時間の差	
旧SM法手順に要した時間－新SM法手順に要した時間 =7分8秒－4分4秒 = 3分4秒	

IV. 考察

結果より、生産性向上を「量的な効率化」及び「質の向上」の両面から考察する。

1. 量的な効率化

SMの使用目的を移乗のみとして捉えるだけでなく、移動と座位保持を加えたことで、SMのスリングの脱着回数が3回から1回に減少した。そのため、旧SM法の15の手順に比べ、新SM法が9つの手順に減少しており、6つの手順が省略されていた。本研究では、手順が省略されたことで、3分4秒もの時間が短縮されていた。一つの事例であるため、短縮した時間は目安である。しかし、手順が省略されたことによる時間短縮であるため、旧SM法から新SM法に変更した場合は、必ず時間が短縮されると考えられた。また、SMのスリングを着用したまま便座に座る場合、座位が不安定な利用者でも便座に一人で座ることができ、利用者の転倒防止を目的とした介護職員の付き添いが不要となる。これは、介護職員の作業や業務量（時間）が減少したことを意味しており、量的な効率化につながったと考えられる。さらに、介護職員が付き添いを離れる時間に他の介護業務を行うことも可能であり、より生産性の向上に繋がる可能性がある。ただし、コールを鳴らすなどの意思表示ができない利用者については、身体拘束にあたる可能性があるため、適切な時間で意思や状態の確認が必要となる。また、トイレ内

で利用者の体調が急変することも考えられるため、利用者の状態に留意する必要がある。

2. 質の向上

介護現場で福祉機器が普及しづらい理由として、人力での介助よりも時間や手間がかかることを指摘する先行研究が多い^{9) 10) 11)}。そのため、SMの介助手順を省略することは、介護職員の福祉機器の使用定着に繋がると考えられる。現に、A介護老人福祉施設のあるユニットでは、SMで移乗を行う利用者に対して、介護職員全員がSMを使用していた。SM等の福祉機器を使用し、利用者を人力で抱え上げない介護は、ノーリフティングケアと呼ばれ、介護職員の身体的負担の軽減のみならず、利用者の二次障害（表皮裂傷、表皮剥離、内出血等）の予防にもつながる¹²⁾。つまり、スリングの脱着回数が減少することでSM使用の定着につながり、それはケアの内容の充実を意味することから、質の向上につながったと考えられる。

3. 生産性向上以外に見られた新SM法の効果と留意点

A介護老人福祉施設では、新SM法に変更したことで、ベッド上でおむつ交換を行っていた利用者が、トイレで排泄できるようになるといった事例も見られた。そのため、福祉機器の使用法を工夫することで、利用者の活動量の増加や活動範囲の拡大にも繋がる可能性が見出された。しかし、SM等の福祉機器の使用法を工

夫することは、利用者や介護職員に危険が伴う可能性があることを留意する必要がある。特に、介護職員だけでは、福祉機器を使用する際の安全面等に関する評価を行うことは難しい。そのため、介護老人福祉施設において広い視点を有しており¹³⁾、福祉機器の活用に必要な知識や専門性を持っている¹⁴⁾、理学療法士等との連携が必要であると考えられる。

これらのことから、SMを従来の移乗のみの使用法から、移動と座位保持を加えた新しい使用法へと変更することで、スリングの脱着回数が減少し手順の省略及び時間の短縮が発生していた。このSMにおける介助手順の省略により「量的な効率化」及び「質の向上」の両面で生産性向上に繋がっていることが、本研究で得られた知見である。

V. 結語

A介護老人福祉施設で行われていた新SM法と旧SM法の一例について、トイレ介助の様子をビデオ撮影で比較と検討を行った。生産性向上の効果について、量的な効率化ではSMのスリングの着脱回数が3回から1回に減少しており、手順が省略されていた。また、質の向上ではSMの定着促進によるケアの内容の充実がなされていた。このことから、介護職員の作業や業務量が減少していたことが明らかとなった。このように、SM等の福祉機器の使用法を工夫することで、生産性向上に繋がることが示唆された。しかし、SM等の福祉機器の使用法を工夫することは、危険が伴う可能性があり、専門的知識を有する理学療法士等との連携が必要であると考えられる。

本研究の課題としては、あくまでA介護老人福祉施設の一つの症例を挙げたに過ぎないため、調査地域や対象人数の拡大が必要である。

文献

- 厚生労働省(アクセス2023年11月21日)「第7期介護保険事業計画に基づく介護人材の必要数について」
<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12004000-Shakaiengokyoku-Shakai-Fukushikibanka/0000207318.pdf>
- 厚生労働省(アクセス2023年9月23日)「介護分野における生産性向上推進フォーラム(令和3年3月12日実施)」
https://www.mhlw.go.jp/stf/kaigo-seisansei_forum.html
- 厚生労働省老健局(アクセス2023年9月23日)「介護サービス事業(施設サービス分)における生産性向上に資するガイドライン」
https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/R1_Seisansei_shisetsu_Guide01.pdf
- 大野倫由(2019)「複数台のスタンディングリフト(スカイリフト)使用によるトイレ介助時間省略についての報告」『高知県理学療法』26, 71-78.
- Zhuang, Z., Stobbe, T. J., Hsiao, H., Collins, J. W., & Hobbs, G. R. (1999). Biomechanical evaluation of assistive devices for transferring residents. *Applied Ergonomics*, 30 (4), 285-294.
- 小林由実(2021)「車椅子患者のトイレ介助方法の違いによる看護師の負担の検討 人力のみのトイレ介助方法とスタンディングマシーンを使用したトイレ介助方法の比較」『日本看護技術学会誌』20, 47-56.
- 介護労働安定センター(アクセス2023年9月23日)「令和3年度介護労働実態調査結果の概要について」
http://www.kaigo-center.or.jp/report/pdf/2022r01_chousa_kekka_gaiyou_0822.pdf
- 富田川智志(2019)「介護老人福祉施設でのスタンディングマシンの導入が介護労働者の作業負担に与える影響」『京都女子大学生生活福祉学科紀要』14, 65-69.
- 富岡公子, 熊谷信二, 小坂博 ほか(2006)「特別養護老人ホームにおける介護機器導入の現状に関する調査報告」『産業衛生学雑誌』48(2), 49-55.
- 岩切一幸, 高橋正也, 外山みどり ほか(2007)「高齢者介護施設における介護機器の使用状況とその問題点」『産業衛生学雑誌』49, 12-20.
- 伊藤健次, 前川有希子(2019)「介護ロボット導入を促進する為に何が必要か 静岡県によるアンケート調査へ自由記載の分析より」『山梨県立大学人間福祉学部紀要』14, 49-59.
- 田上優佳, 有田伸弘, 香川幸次郎(2018)「ノーリフティングケアがもたらす利用者への効果の研究」『関西福祉大学研究紀要』21, 89-97.
- 林隆司, 泉谷利彦, 縄井清志ほか(2010)「介護老人保健施設における専門職の役割-リハビリテーション職・看護職・介護福祉士・ソーシャルワーカーの連携の視点から」『医療保険学研究』1, 41-54.
- 朝倉弘美, 備酒伸彦, 金谷親好ほか(2013)「介護老人保健施設職員の移乗関連用具に対する認識及び腰痛との関連」『理学療法科学』28, 329-334.
- 【ノーリフトリハ】スカイリフトで時間と人手を生む2
<https://www.youtube.com/watch?v=-DGKpxEu40M>

論文投稿について

『日本社会福祉マネジメント学会誌』（2025年 第5巻）

1) 自由論文投稿について

保育、介護、障害、ICTなど社会福祉を研究領域とした研究

応募締切 2024年9月30日(当日消印有効)

2) 特集論文投稿について

テーマ：社会福祉とマネジメントに関する研究

応募締切 2024年9月30日(当日消印有効)

応募にあたっての注意事項

- 投稿の種類は、「原著」「総説」「事例報告」「紹介」（新規性を有する事項についての情報を提供するもの）に加え、「その他」として前記に該当しない投稿も、原則として受付けるものとします。
- 論文投稿は、自由論文または特集論文において、筆頭者、連名者合わせて1人2編までとします。
ただし、筆頭者で1人2編投稿することはできません。
- ※ 筆頭者1編と連名者1編、あるいは連名者2編で投稿することは差し支えありません。

上記の解釈は次の通りとなります。

【自由論文】 筆頭1編と連名1編、あるいは連名2編で、 合計2編まで投稿可能	または	【特集論文】 筆頭1編と連名1編、あるいは連名2編で、 合計2編まで投稿可能
---	-----	---

- 自由論文と特集論文の両方に応募することはできません。
- 社会福祉の理論の発展、実践に貢献する研究であること。また、研究に使用する言語は日本語であること。
- 査読料および掲載料について
投稿後の査読には査読料が、掲載時には掲載料が別途発生します。
詳しくは、「執筆規程」をご確認ください。
年会費、査読料、掲載料については銀行振込をお願いいたします。
- 応募にあたっては、必ずJASMのホームページ(<https://jasm-society.info/journal/>)をご確認ください。

【編集委員会】

- 委員長 中坪史典(広島大学大学院)
 - 委員 金井智恵子(和洋女子大学)
 - 木村拓磨(東海学園大学)
 - 倉盛美穂子(日本女子体育大学)
 - 土居裕和(長岡技術科学大学)
 - 二宮祐子(和洋女子大学)
- (五十音順)

日本社会福祉マネジメント学会誌
Journal of Social Welfare Management
Vol.4 2024年3月31日発行

編集	一般社団法人日本社会福祉マネジメント学会 編集委員会
発行責任者	中坪史典
発行	一般社団法人日本社会福祉マネジメント学会 〒130-0013 東京都墨田区錦糸1-2-1
URL	https://jasm-society.info/
E-mail	otoiwase@jasm-society.info
